KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY HISTORICAL HERITAGE RESEARCH REPORT 2016

京都橘大学 歴史遺産調査報告 2016

山科大塚・小山石切丁場、御香宮神社、二条城堀川石垣、萬明寺本堂

2017年 3 月
京都橘大学　文学部

はじめに

本学の歴史遺産学科は、その前身となる文化財学科が1996（平成８）年に設置申請、同年12月に認可、1997（平成９）年４月より開設された。その後、2012年４月１日より文化財学科から歴史遺産学科へ学科名を変更した。

文化財学科を開設した当時の門脇禎二学長は「①文化財・伝統文化を尊重する心と専門的知識・技能の基礎を身につけて、研究者・職業人をめざしたりあるいはすぐ社会生活に入る学生の育成と、②体系的な「文化財学」の創出をめざす研究の進展、を目的においた」とした。

そのうちの専門的知識・技能の基礎を身につける学びの一環として、本学では2000（平成12）年３月から開始した京都市伏見区にある法琳寺跡の測量調査以降、近畿地方東北部のフィールドを中心として、発掘・測量調査を継続して行ってきた。調査には多くの学生が参加し、現場での実践的な調査の方法や技能を学び取っている。

本年度は主に、山科大塚・小山石切丁場などの諸調査を実施した。ここではそれらの成果を中心として報告するものである。報告書を作ることもまた、学生が調査から報告書発行までの一貫した流れを知るための大切な作業であり、これらの活動全体を通し、文化遺産のより一層の周知に役立てられれば幸いである。

さて、学科名を歴史遺産と銘打ったのは、近年世界遺産や文化的景観など、多様化する文化財とその周辺学の拡がりを省みた結果である。「人類の所産のうち、考古資料、彫刻、絵画、工芸品、歴史資料などの動産遺産と、建造物、近代化遺産、都市・文化的景観、史跡、埋蔵文化財といった土地に定着した不動産遺産、これらの２つの領域の文化遺産情報を対象として歴史遺産という認識の学びに高める」というものである。

この歴史遺産調査報告書は、そのうちの考古遺産、建築遺産といった文化遺産を主とする。我々がここで文化遺産に関わる作業と勉学に向かえるのは、ひとえに調査にあたらせていただく際の現地の方々や、多くの関係者の方々のご理解・ご協力の賜である。この場を借りて心から感謝申し上げます。今後とも文化遺産調査についての変わらぬご理解、ご協力、ご指導を賜りたく、お願い申し上げる次第である。

2017年３月31日

京都橘大学文学部

例　言

1．本書は、京都橘大学が2016年度に実施した京都市山科大塚・小山石切丁場や御香宮神社内刻印石などの歴史遺産学科歴史遺産コースを主とした文化遺産の調査報告書である。

2．調査した遺跡と遺構には、国土座標世界測地系によってその位置を示した。

3．本文の執筆には、第１章を一瀬和夫・嵯峨根絵美・登谷伸宏、第２章を垣内彩那、第３章を広瀬侑紀、第４章を垣内彩那、第６章を登谷伸宏があたった。第５章については、奥田　尚氏より玉稿を賜った。

4．本書の編集は、一瀬和夫・嵯峨根絵美が担当し、各執筆者や参加学生がこれを助けた。

5．調査にあたっては、萬明寺、泉佐野市教育委員会、高島市教育委員会、大塚共有山護持会、川原林正達、廣田浩治、山本晃子、奥田　尚、奥村弥恵、森岡秀人、馬瀬智光、新田和央、西森正晃、黒須亜希子、平井信夫、岩村義憲、中川亀造、武内良一、久保孝、青地一郎、福家　恭、高田裕一、竹村亮仁をはじめとする関係機関、諸氏諸嬢にご高配を賜った。記して感謝したい。

6．山科大塚・小山石切丁場の調査の一部は京都橘大学2016年度共同研究助成費の補助を受けた。

目　　次

はじめに・例言
目次
第１章　2016年度の文化遺産調査の概要と経過……１
第２章　伏見城と山科大塚・小山石切丁場の概観……３
第３章　大塚・小山石切丁場葭ヶ谷Ａ地区の石材分布調査……９
第４章　御香宮神社内刻印石について……23
第５章　二条城堀川沿いの石垣材について（予報）……30
第６章　2016年度の建造物調査……37

図・表目次

図１　山科大塚・小山石切丁場位置図……３
図２　山科大塚・小山石切丁場大塚地区刻印石の分布……４
図３　刻印見取り図……５
図４　葭ヶ谷Ａ地区の地形図刻印・矢穴石分布……10
図５　矢穴形状からみた採石状況（葭ヶ谷Ａ地区）…11
図６　地形からみた採石状況（葭ヶ谷Ａ地区）……12
図７　葭ヶ谷Ａ地区の矢穴横断面形状……13
図８　葭ヶ谷Ａ地区の矢穴石（１）……14
図９　葭ヶ谷Ａ地区の矢穴石（２）……15
図10　御香宮神社位置図……23
図11　御香宮神社境内参道……23
図12　御香宮神社刻印石（１）……24
図13　御香宮神社刻印石（２）……25
図14　二条城堀川石垣調査位置……30
図15　二条城堀川石垣材の石種……33
図16　萬明寺配置図……37
図17　萬明寺本堂平面図　……41
表１　伏見城関連山科区大塚・小山石切丁場刻印石一覧……５
表２　葭ヶ谷Ａ地区　石材法量一覧……12
表３　葭ヶ谷Ａ地区　矢穴法量一覧……13
表４　御香宮神社刻印石一覧……28
表５　二条城堀川石垣材の石種と形状と粒径……32
表６　二条城堀川石垣材の石種と矢穴跡の時期……32
表７　二条城堀川石垣材の矢穴跡の形状と石種と銘・刻印比較……34

第１章

2016年度の文化遺産調査の概要と経過

１．2016年度の調査状況

今年度の考古遺産の現地調査作業については、夏期を中心に、京都市山科区大塚・小山石切丁場、京都市伏見区御香宮神社刻印石、京都市中京区二条城堀川石垣の調査を実施した。

建築遺産の調査については、日根野中学校区、萬明寺本堂などで実施した。

本書の全体の整理作業にあたっては、歴史遺産学実習、遺産情報演習Ｉの授業を中心に行った。

今年度に主として歴史遺産コースが実施した調査の概要は、以下に紹介する通りである。

２．泉佐野市日根野中学校区の寺社建築調査

泉佐野市は、大阪府の南部に位置する。市域は、近世までの町場であった佐野村と、北中通村・日根野村・長滝村・上之郷村・南中通村・大土村の旧六ヶ村により構成される。

泉佐野市では、2014（平成26）年度から３ヶ年の計画で、将来の歴史文化基本構想策定に向けた文化財総合把握調査を実施した。最終年度にあたる16年度は、市域のうち日根野中学校区内に所在する寺社建築の調査を行った。調査は、泉佐野市建造物調査会（代表：登谷伸宏）が担当し、本学科の学部生が調査補助・図面作成などを分担した。

調査方法、および内容は以下の通りである。まず、日根野中学校区に所在する寺社建築の悉皆調査を行った。つぎに、そのなかから顕著な特徴を持つ建物を選び、詳細調査を実施した。詳細調査の内容は、対象建物の平面の実測、改造状況と復原についての調査、棟札・関連文書などの調査、建立年代の確認、建築的特色の記録、写真撮影である。

調査は登谷伸宏を調査主任とし、2016年６月24日、７月１・８日、８月８～９日、９月１～２・５～６日、11月25日、2017年１月19・27日、２月７日に行った。

調査参加者は、大城友莉奈・大地未来・岡﨑瑠艶・神田純花・小林杏実・中野小夜里である。

３．高島市萬明寺本堂の調査

萬明寺は、滋賀県高島市マキノ町西浜に所在する浄土真宗本願寺派の寺院である。境内は、西浜の集落のほぼ中央、湖岸沿いを走る西近江路から少し北に入ったところに位置する。東側に山門を開き、本堂は敷地の中央に所在する。本堂の南西には鐘楼が立つ。

本堂の建物については、これまで文化財としての調査が入っておらず、歴史的な評価が定まっていなかった。そこで、今年度は本堂の実測調査、および史料調査を、萬明寺の協力のもと実施した。具体的には、平面の実測、改造状況と復原についての調査、棟札・関連文書の調査、建立年代の確認、建築的特色の記録、写真撮影である。

調査は登谷伸宏を調査主任とし、2016年６月11日、８月６日に行った。

調査参加者は、稲村匠哉・大城友莉奈・大地未来・岡﨑瑠艶・柏本大輔・神田純花・高美愛・小林杏実・中島侑介・中野小夜里・中本好香・松岡大貴・馬渡康輝である。

４．京都市山科区大塚・小山石切丁場、大塚東群葭ヶ谷Ａ地区の実測調査

京都市山科区大塚・小山の山中に所在する石切丁場では、本学の裏山となる行者ヶ森の山の頂上付近から東及び北斜面の大塚と山科・音羽川を離てた小山の山中に刻印と矢穴のある石が分布する。大塚は刻印や矢穴石の分布によって大きくわけて、大塚西群と大塚東群に分けることができる。

その石切丁場のうち今年度は大塚東群の葭ヶ谷Ａ地区の測量及び矢穴の残る石材の分布把握と実測を行った。

調査は一瀬和夫を調査主任とし、広瀬侑紀がこれを助けた。日程は、2016年４月30日、７月３日、８月７～10・14～17日、12月23・25日に行った。

調査参加者は、嵯峨根絵美、垣内彩那、石塚真和、小田千夏、神田純花、高　美愛、吉岡健太朗、足立紫織、荒木紳吾、伊澤　葵、石田真隆、小林　悠、尾関有紀、河内千裕、鷺坂美優、佐藤　優、滋賀七海、杉浦紗生、杉本漱一郎、中島悠輔、中谷俊哉、中村柚彩菜、西尾瑠亜、長谷川翔一、深尾英佑、松沢博男、三宅川柚希、森果歩である。

写真１　山科大塚・小山石切丁場　調査風景

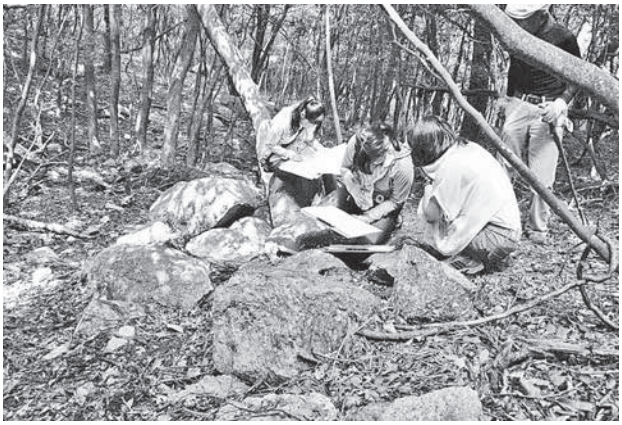


写真２　山科大塚・小山石切丁場　調査風景

写真３　山科大塚・小山石切丁場　調査風景

写真４　二条城堀川　石垣実測調査

５．御香宮神社境内刻印石と二条城堀川石垣の実測調査

京都市には聚楽第・伏見・二条・淀城といった中世末～近世前期石垣城郭がある。近年では、京都市内の頻繁な発掘調査などでその様子が詳細に判明しつつある。一部が明治天皇伏見桃山陵を含む伏見城では、三ノ丸南辺から四ノ丸にかけての石垣材が宮内庁に調査され、現地に展示されており、西側に位置する御香宮神社にも刻印石や矢穴石が集められている。

また、伏見城の石垣石材は二条城や淀城にも再利用が認められており、二条城東側の堀川護岸にも矢穴・刻印をもつ石材がある。これらの石垣石材の中には石切のための矢穴を残す石材、刻印の入った石材もあり、山科大塚・小山石切丁場との関連も考えられる。

今回本学は、御香宮神社境内の刻印石及び矢穴石の実測、二条城堀川石垣の実測を行った。

調査は一瀬和夫を調査主任とし、広瀬侑紀がこれを助けた。日程は、2016年９月30日、10月１日、11月４・５日に行った。

調査参加者は、嵯峨根絵美、垣内彩那、石塚真和、小田千夏、神田純花、足立紫織、荒木紳吾、伊澤　葵、石田真隆、小林　悠、尾関有紀、河内千裕、鷺坂美優、佐藤　優、滋賀七海、杉浦紗生、杉本漱一郎、中島悠輔、中谷俊哉、中村柚彩菜、西尾瑠亜、長谷川翔一、松沢博男、三宅川柚希、森　果歩である。

第２章

伏見城と山科大塚・小山石切丁場の概観

１．山科大塚・小山石切丁場の現状

山科大塚・小山石切丁場の発見は、1979年３月に京都市山科区椥辻在住の故山田次郎氏が山科盆地東方の山塊「行者ヶ森」山の持山区域にある大石に刻印の存在が報告されたのを初めとする。同年12月の伏見城研究会からの問い合わせを経て、1981年１月２日に「角立ち四つ目結」刻印を確認し、翌日新たな「角立ち四つ目結」が発見され、刻印石が遺存することが明らかになった。その後、武内良一氏をはじめとする地元調査グループが調査を引き継ぎ、次々と刻印石の所在を明らかにした。石切丁場内の石材分布とそれに対応する石材番号も付けられている。その結果、平成27年度から埋蔵文化財包蔵地として指定された。そして、現在に至っても精力的な分布調査を続けている。

本学は2015年に、森岡秀人、西岡正晃、中川亀造、武内良一、久保　孝、青地一郎、福家　恭、高田祐一、望月悠佑、広瀬侑紀の石切丁場踏査関係者に導かれて、刻印の状況についての知見を得た。

地元の平井信夫、岩村善憲氏の御好意も受け、2015年夏から本学の生徒も測量など具体的な調査活動に入らせていただいている。

2016年には地元調査グループによって新たに「十」の印が入った刻印石を確認でき、年を追うごとに例が増えている。

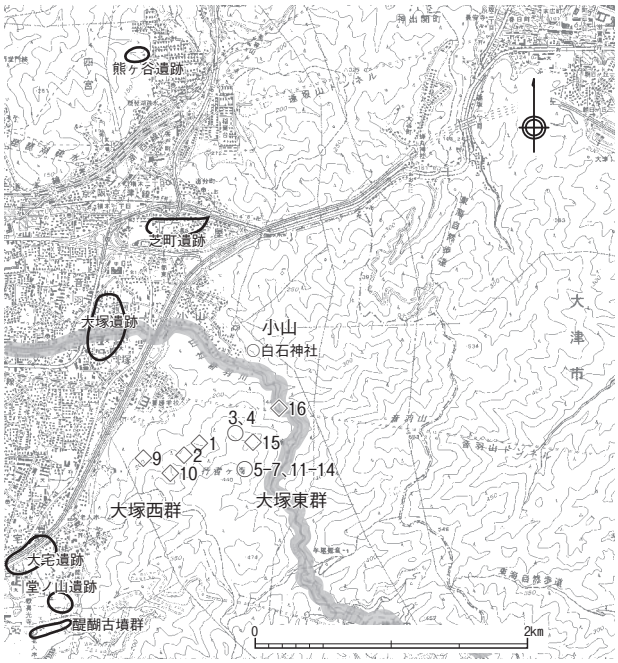


図１　山科大塚・小山石切丁場位置図

２．山科大塚・小山石切丁場の刻印

刻印石とは石垣を構成している石で、表面に様々な印が刻まれている石を指す。刻印はノミを使って点彫りされている。家紋そのものの印だけでなく、○△□◇といった単純なものからそれらを組み合わせた幾何学的なもの、卍や五芒星など一見宗教的なものに思われるものなど様々な刻印が、およそ数百種類は見つかっている。中には大名等の名前や経文などといった文字が刻まれているものもある。

刻印が刻まれている理由としては様々である。その中で最も多いのは、自らの領地を明確にするために印を刻んだというものである。石切丁場から複数の刻印が見つかっていることから、同じ石切丁場で複数の大名家が作業を行っており、領地を明確にするために刻印を彫ったとみられる。また、江戸幕府が全国の大名に江戸城や大坂城などの普請を命じたため、築城の際、各大名に担当場所が割り振られた。江戸城は遠く離れた伊豆半島、大坂城は瀬戸内から、海岸あるいは山中から石を切り出し、陸路海路と運んだ。

刻印には石垣の工事にたずさわった大名の家紋を刻んだものや、石を積んだ職人のサインで、担当場所が他の大名との作業を担当した場所の区別などを表していた。その他にも、石材の原産地を表す、奉行の名を記すなど、その役割は様々である。また、五芒星の刻印が確認されたことで、鬼門除けとして彫ったというものもある。ともかく、これらの存在はその丁場の使用目的や時期を判断することが期待され、もとより刻印石が集中することが石切丁場であるということを端的に示してくれる有用な品物である。

３．山科大塚・小山石切丁場の刻印分類

山科大塚・小山石切丁場の刻印は2016年７月の段階で、17石22刻印が確認される。それらは大きく分けて４種類の刻印が存在する（図３、表１）。

１つ目は、一文字一星（以下、一に○）の毛利家、家紋略式刻印とされる。現在見つかっている刻印で、最も多い。なかには「二」が付属するものも存在し、これは

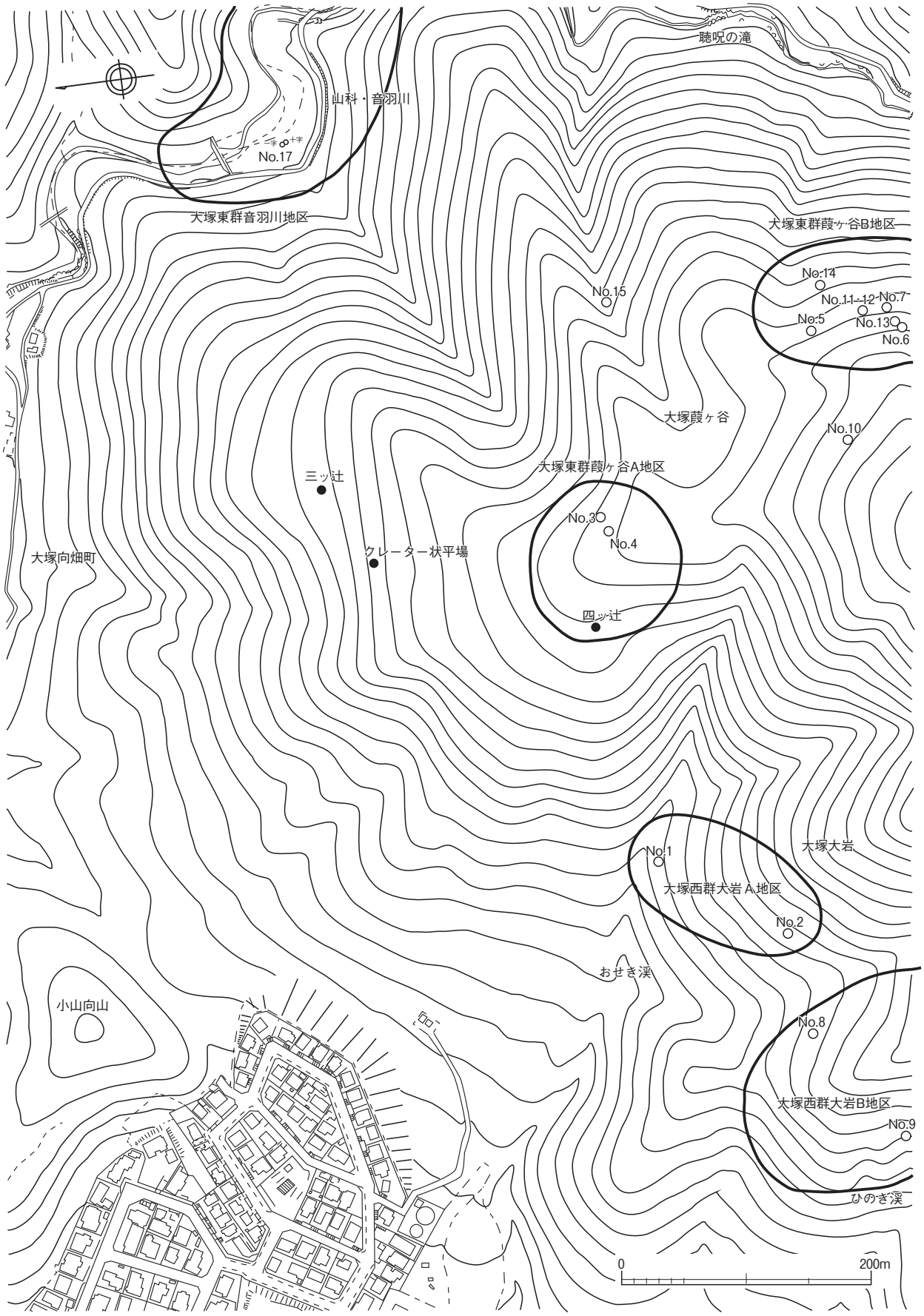


図 2　山科大塚・小山石切丁場大塚地区刻印石の分布

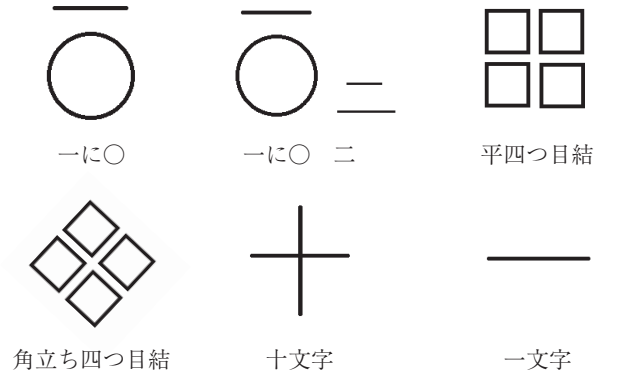


図３　刻印見取り図

主刻印＋副刻印の関係にあると考えられている。大きい主刻印に小さな副刻印が添えられるように付属し、副刻印の方が浅く彫られ微弱なものもある。

２つ目は、４つ並んだ四角の中心に丸が掘り込まれている平四つ目結刻印と、◇が掘り込まれている角立ち四つ目結刻印である。これらは刻印の初現期のものとされ、若狭京極家所要の可能性が考えられている。

３つ目は、「十」の刻印である。この「十」の意味は、地元の調査グループの中で漢数字、島津家の家紋などで意見が分かれる。

４つ目は、「一」の刻印である。この「一」は、類似刻印が見つかっていないため、漢数字であると考えている。また、ノミではつった跡が残っているだけとも考えられ判然としない。

こうした刻印が施されることで、その刻印石が分布する場合、そこが安土桃山期、江戸初期あたりの石切丁場であるという見通しが高まる。この山科大塚・小山石切丁場のある音羽山系は丹波帯で構成されるが、大塚や小山付近には、斑状花崗岩脈が一部露頭している地域がある。大塚は行者ヶ森に広がり、小山は山科・音羽川を挟んで北側に位置する（図１・２、表１）。

刻印名に加えて、石切り作業の痕跡として割面に矢穴列跡を残す石材もある。その石材の種類は主に玄武岩質凝灰岩と石英斑岩及び花崗斑岩となる。地域は行者ヶ森北方の東斜面に位置しており、石材としては主に花崗斑岩が分布する。大塚は大きく東西２つと音羽川の地区に分かれる。細かくは大塚西群がおせき渓から大岩側にＡ～Ｃ地区、東側の大塚東群が大塚葭ヶ谷側にＡ・Ｂ地区となる。

矢穴や刻印のある石は大塚・小山地域の中でも広範囲に分布している。残りの良好なもの悪いもの様々であるが、今後も順次確認されていくものとされる。それぞれの刻印石は岩肌や切出す予定の石材に見られ、特に四つ目結の刻印のものは石切場の境界を示すように各谷筋ごとに分布している状況である。

表１　伏見城関連山科区大塚・小山石切丁場刻印石一覧

確認番号	群	地区	刻印名	刻印の法量（長さ/径）	石材	石の法量（横・縦・奥行）他	特記	備考
1	大塚西	大岩Ａ	角立ち四つ目結	辺13cm	玄武岩質凝灰岩	2.4m×1.04m×0.9m	1977年確認	
2	大塚西	大岩Ａ	角立ち四つ目結	辺13cm	石英斑岩	2.48m×3.05m×2.07m	1979年確認	
3	大塚東	葭ヶ谷Ａ	一に○	30cm/28cm	花崗斑岩	4.5m×3.0m	2012年確認	北面
			一に○　二	27cm/30cm	〃			東面
4	大塚東	葭ヶ谷Ａ	一に○　二	23cm/26cm	〃	3.0m×3.5m	2012年確認	
5	大塚東	葭ヶ谷Ｂ	一に○	30cm/30cm	〃	2.4m×1.7m	2013年確認	
6	大塚東	葭ヶ谷Ｂ	一に○	20cm/23cm	〃	2.2m×1.7m	2013年確認	
7	大塚東	葭ヶ谷Ｂ	一に○	30cm/40cm	石英斑岩	2.6m×4.0m	2013年確認	
8	大塚西	大岩Ｂ	角立ち四つ目結	辺13cm	花崗斑岩	1.6m×1.2m×1.6m	2013年確認	
9	大塚西	大岩Ｂ	角立ち四つ目結	辺13cm	石英斑岩	4.1m×0.9m×1.2m	2013年確認	
10	大塚東	葭ヶ谷Ｂ	一に○	30cm/32cm	花崗斑岩	2.1m	2013年確認	同石併刻例を別々に確認
			平四つ目結	辺20cm			2014年確認	
11	大塚東	葭ヶ谷Ｂ	一に○	18cm/16cm	〃	2.38m	2013年確認	同石併刻例を別々に確認
			平四つ目結	辺15cm			2014年確認	
12	大塚東	葭ヶ谷Ｂ	一に○	20cm/16cm	〃	2.1m	2014年確認	同石併刻例を別々に確認
			平四つ目結	辺14cm	〃		2014年確認	
13	大塚東	葭ヶ谷Ｂ	一に○　二	25cm/18cm	〃	2.6m	2014年確認	二は６cm幅
14	大塚東	葭ヶ谷Ｂ	一に○	40cm/43cm、38cm	〃	縦2.0m	2014年確認	
15	小山	小山Ａ	一に○	13cm/14cm	石英斑岩	7.0m×4.2m×4.75m	2014年確認	白石神社
16	大塚	葭ヶ谷Ｂ	一に○　二		〃		2015年確認	
17	大塚東	音羽川	十文字	14cm/10cm	〃		2016年確認	
			一文字	13cm			2016年確認	

現在山科大塚・小山石切丁場にある刻印は４種類だが、主に点在しているのは一に〇刻印と四つ目結刻印の２種類である。この２種類の刻印を地図上で確認すると、大塚西群と大塚東群を分けるおせき渓の谷筋を境に、大塚西群は角立ち四つ目結刻印、大塚東群は一に〇刻印という様にきれいに分かれていることがわかる（図２）。

しかし、大塚東群葭ヶ谷Ｂ地区を詳しく見てみると、平四つ目結刻印ではあるが併刻している石材がある。刻印は地域（領域）範囲差、時期差をもって1つの石材に彫られる場合があり、そこには刻印石の譲渡など所有権の移動、境界の必要な場合や大名・藩が複数協業の意図を示す場合などが考えられようか。併刻のあるNo.10～12の３石は一に〇と平四つ目結の２種が門構えのように左右に並び立っている。現段階では大塚東群葭ヶ谷Ｂ地区において、併刻印の入った石材以外に平四つ目結刻印の入った石材がみられないということが言える。

４．伏見城の沿革と現状

さて、山科の石切丁場から切り出され、使用されたであろう最も有力な場所は、音羽川、山科川を下り、宇治川との合流地点にある伏見区所在の伏見城である。この石垣石材を利用した大規模な築造の機会は数期にまたがっており、ここではその複雑な伏見城の変遷について、まず詳しく見てみる。

伏見は東山から連なる丘陵最南端に位置し、南には巨椋池が広がり水運により大坂と京とを結ぶ要衝の地であった。

ひとくちに「伏見城」といっても、それはひとつの城を表すものではない。伏見城は３度にわたって築城され、第１期（1592～1596年）、第２期（1596～1600年）、第３期（160～1623年）の３つの時期に分けて理解することができる。以下に、伏見城建造にかかわるものに下線をを示しながらその変遷を追う。

最初の城は朝鮮出兵開始後の1592（文禄元）年８月に豊臣秀吉が隠居後の住まいとするため、現在の京都市伏見区桃山町泰長老にあたる伏見指月に建設を始めたものである。1593（文禄２）年に入り、明との講和交渉が動きはじめ、明の使節を迎え日本の国威を見せつける目的と、同年８月３日に拾丸（豊臣秀頼）が産まれ、拾丸に大坂城を与えると想定したことで、隠居屋敷は大規模な改修が行われることになった。1594（文禄３）年10月頃より宇治川の流路を巨椋池と分離して伏見に導いて城の外濠とするとともに、城下に大坂へ通ずる港を造り、巨椋池には小倉堤を築き、その上に街道を通して新たな大和街道とするなど大規模な土木工事が行われた。また宇治橋を移して指月と向島の間に架け豊後橋としたとの伝えもあり、都から大和・伊勢及び西国への人の流れをすべて城下に呼びこもうとした意図がうかがえる。

築城は1594（文禄３）年から本格的に始まり、普請奉行に佐久間政家が任命され、石材は讃岐国小豆島から、木材は土佐国、出羽国からも調達され、同年４月には淀古城から天守、櫓が移建された。同年10月には殿舎が完成し、翌1595（文禄４）年に秀次事件が起きると、同年７月には破却された聚楽第からも建物が移築され、宇治川の対岸にある向島にも伏見城の支城、向島城が築城された。また、1594（文禄３）年末より城下町の整備も行われた。このとき築城されたものを指月伏見城、後に近隣の山手側の木幡山に再築されたものを木幡山伏見城と呼んで新旧で区別される。さらに木幡山伏見城は豊臣期のものと、伏見城の戦いの焼失跡に徳川家康によって再建された徳川期のものとに分けられる。

指月に築かれた伏見城は築城開始から２年後に1594（文禄３）年に秀吉が入城し、その２年後に完成をみるが、その直後の７月13日に起こった慶長伏見地震によって倒壊した。伏見城は大きな地震に見舞われたが火災は起きなかったようで、櫓や殿舎の木材などが再利用可能で、翌14日から指月から北東約１kmの木幡山に新たな城が築き直されることになり、翌1597（慶長２）年に完成し秀吉は移城する。同年５月には天守閣と殿舎が、さらに10月には茶亭が完成した。築城が終わった伏見城は、本丸の西北に天守閣があり、西方に二ノ丸、北東部に松ノ丸、南東部に名護屋丸、曲輪下には三ノ丸、山里丸等の曲輪を配し、出丸部分を加えると12の曲輪が存在した。

この時期伏見城の築城と並行して、名護屋城の築城、方広寺の大仏殿建設、大坂城の三の丸と惣構え、そして聚楽第の破却等が行われた。秀吉は大坂城と伏見城を行き来したが、晩年は伏見城で過ごすことが多かった。秀吉は1598（慶長３）年に病により城内で没した。在城期間はわずか４年であった。

秀吉の死後、その遺言によって豊臣秀頼は1599（慶長４）年正月に伏見城から大坂城に移り、代わって五大老筆頭の徳川家康がこの城に入り政務をとった。五大老の１人である前田利家が同年３月３日に病死、家康は石田三成を同年３月10日に佐和山城へ追放すると、13日に留守居役として入城する。同年９月に家康が大坂城に移ると、伏見にあった大名屋敷のほとんどが大坂に移ってし

まい、伏見城の城下町は荒廃していった。家康は翌1600（慶長５）年６月、会津征伐に動き出す（関ヶ原の戦い）。この間隙をぬって、小早川秀秋・島津義弘連合軍は鳥居元忠が城代となっている伏見城を４万の兵で攻城、同年８月１日炎上、落城した。このとき、三成は城内の建物をことごとく焼き払ったため、秀吉時代の主要建築は焼亡した。

焼失した伏見城は関ヶ原の戦いで勝利した家康によって1602（慶長７）年ごろ再建された。再建は木幡山伏見城を踏襲するが、弾正丸、大蔵、得善丸、御花畑山荘と呼ばれる北西部の曲輪群とそれを取り巻く堀は放棄された。このとき建物や部材は二条・淀・福山城などに移築されたという。翌1602（慶長７）年６月には藤堂高虎が普請奉行に起用され、同年末頃にはほぼ再建がなり、同年12月には家康は伏見城に帰城した。再建された建物の瓦には豊臣家の家紋、桐紋が使われた。このころより大坂城に移っていた大名屋敷が伏見城に戻ったが、関ヶ原の戦い直後に城下町は焼き払われ、跡地が東西両軍の大名に与えられたと考えられている。翌1603（慶長８）年、家康は伏見城で征夷大将軍の宣下を受ける。以後三代徳川家光まで伏見城で将軍宣下式を行っている。1605（慶長10）年３月、家康は伏見城で朝鮮使節と会見し、文禄・慶長の役で関係悪化していた朝鮮と和議を成立させる。同年御殿建設に伴い、家康も本丸から西ノ丸に移り、さらに二条城に移るが、本丸部分が完成する同年８月20日には伏見城に帰城する。新しくなった御殿で徳川秀忠の将軍宣下が執り行われた。その後も作事は続けられたが、駿府城の改築により、翌1606（慶長11）年頃には伏見城の作事も停止され、器材や屋敷も駿府城へ運ばれていった。家康が駿府城へ移った後は、1607（慶長12）年に松平定勝が城代となり、また大番等による在番や定番が行われた。

大坂の役後、しばらくは二条城が将軍参内時の宿舎、伏見城が居館用として利用され続けていたが、一国一城令の主旨からも両城を維持するのは困難とし、1619（元和５）年には伏見城の廃城が決まり、翌年から城割りが始まった。1623（元和９）年７月16日、家光の将軍宣下が本丸部分に若干の修復をして執り行われた。その後完全な廃城となった。伏見城の天守は二条城に、また多くの建物は福山・淀城に吸収され、それ以外にも全国各地に移築された。

廃城後の伏見城の跡地には、特に建材の需要はなかったと思われる。元禄時代ごろまでに桃の木が植えられて桃山と呼ばれるようになり、現代に至り伏見城は桃山城あるいは伏見桃山城とも呼ばれるようになった。

伏見城跡は伏見奉行所の管理とされ幕末まで立入禁止となっていたが、本丸跡などの主郭部分はのちに明治天皇陵（桃山陵墓）とされたことから現在も無許可での立入りが禁じられる。

2009年２月20日に、宮内庁の許可を得た日本考古学協会が伏見桃山陵の本格的な見学調査を行った。

また、伏見城花畑跡は1964（昭和39）年に遊園地「伏見桃山城キャッスルランド」が建設され、園内には洛中洛外図に描かれた伏見城を参考にして５重６階の大天守と３重４階の小天守、櫓門などを伴った模擬天守が、鉄筋コンクリート構造で造られた。2003年１月に閉園したが、模擬天守は京都市民の運動によって伏見のシンボルとして保存されることとなり、無償で京都市に贈与されたほか、敷地を含めて同市により伏見桃山城運動公園として整備された。ただし、模擬天守は耐震基準を満たしていないことから内部非公開となっている。

伏見城の転用とされる建材は近畿地方の社寺を中心に多く存在しており、そのほとんどが秀吉時代の遺構とされる。しかし、指月伏見城は地震で倒壊し、木幡山伏見城は兵火で焼失しているため、移築の伝承が事実である建物はわずかだと思われる。実際、指月伏見城の移築であることが裏付けられている西教寺客殿も地震で破壊された残材で構成されており、少なくとも秀吉時代の建築が完存する可能性は低いと考えられている。

指月伏見城の遺構と考えられるもののうち、現在も地形の変化として残っているものに、舟入がある。観月橋の北東側、桃山町泰長老の公団住宅や公務員宿舎が建ち並んでいる台地の東側に位置する南北方向の大きな谷状の地形である。現在でも、団地のある台地と15～20mの比高差のある大きな谷である。なお、この谷奥では金箔瓦も出土している。指月伏見城は昨年、一昨年と住宅建替により、石垣が検出されている。

木幡山伏見城の範囲は大半が宮内庁の管理地になっており、ほとんど調査例がないが、城の周辺部で石垣などが確認されている地点が２地点ある。まず桃山町大蔵の、現在は北堀公園となっているＥ字形の低地の南西隅で石垣が確認されている。この地点は、大蔵丸の西側にあたる。見つかった石垣は東西に40m以上、高さ３～４mほどである。石材はすべて花崗岩であるが、自然石が多く、割石は少ない。平均的な大きさは１×0.5mほどである。裏込めの栗石は少なく、基礎部分に銅木や杭もないとい

うことであり、石垣というよりも貼石といった方が適当である。石材は、主に花崗岩の自然石が使われている。

そこから東に400mほどの地点では石垣の裏込めが確認されている。ここでは石垣の石材は全く残っていなかったものの、裏込めが確認されたことから石垣の存在が確認された。この地点は、本丸の北東にある松ノ丸北側の石垣にあたる。

こうした石垣に伴う石材は伏見桃山の地で数多く残されている。後の章では、こうしたものの一部と山科大塚・小山石切丁場のものとの比較のために例示したい。

5．他城との比較

さて、山科大塚・小山石切丁場に関連するであろう石材は、伏見城以外でも各所数種類の石材が見つかっている。ここでは、若干の城郭や採石場の概要や確認された刻印についての概要を述べるが詳細は後章に委ねる。

まず伏見城の西の御香宮神社は京都市伏見区の城下町跡にある（図10）。境内や周囲の石垣には多くの刻印、矢穴石がある。特に参道東西にある刻印石は見学しやすい。旧伏見城から採取されたとされる石で、13石確認できる。刻印の種類は、丹、串団子、二重四角、丸に大、丸に十、鼓形、二連丸の７種類である。石材の種類は主に石英斑岩と花崗斑岩がある。ただし、丹、二重四角、丸に十、鼓形の刻印が山科からの石材でそれに由来する刻印石に可能性があるが、現在、山科大塚・小山石切丁場からはこれらの刻印は確認されていない。参道のものの詳細は第４章に載せた。

明治天皇伏見桃山陵の参道脇には、埋設管工事の際に出した伏見城石垣の残石が展示される（図10）。そこでは７石９刻印が確認される。刻印の種類は丸に十、×、二連三角、凸の４種類である。丸に十、×、凸の刻印が石種から山科由来の刻印と考えるが、山科大塚・小山石切丁場からはどの刻印も確認されていない。しかし、御香宮神社境内で確認できる刻印石同様、丸に十、×の刻印は山科大塚・小山石切丁場で見つかっている十文字と関係している可能性がある。

京都市中京区にある二条城の東側に面した堀川の川底の東側には加工した石材を落し積みにした現代の石垣が伸びており、西側には切り出した石材をさほど加工せずに積み上げた石垣がある（図14）。その石垣には、１銘文と21刻印が確認されている。堀川では山科大塚・小山石切丁場と同様の平四つ目の刻印も確認される。2016年に奥田尚氏の石種調査とともにそれらを調査した。その結果を第５章の予報として載せた。刻印の法量は13～18cmと、石切丁場と比べて大きいものばかりで、石材の種類も斑状花崗閃緑岩という枚方の穂谷から運んできたとされる石材であることが分かった。山科大塚・小山石切丁場と同じ石英斑岩がわずかではあるが確認された。刻印も見つかっており、丸の刻印の中に四つ目結刻印を彫ったものである。法量は、丸が23cm、四つ目結が辺13cmと、山科大塚・小山石切丁場にある刻印の法量と一致する。

これらの他に、淀城石垣などにも刻印石が残り、山科大塚・小山石切丁場との関係を追求するためには欠かせないものである。

参考文献

有馬　伸　2009「桃山陵墓地下水道管布設工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第60号　宮内庁書陵部

武内良一　2015「「山科の石」について―伏見城関連　山科（大塚・小山）の石切場―（下）」『古代学研究』207号

（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館　2001「是ヨリ北紀州」考古アラカルト26『リーフレット京都』No.153

日本史研究会編　2001『豊臣秀吉と京都―聚楽第・御土居と伏見城―』文理閣

山科石切場調査・研究グループ　2015『伏見城関連の石切場について―「豊徳」期における石垣石材調達をめぐる所見の二、三―』

第３章

大塚・小山石切丁場葭ヶ谷Ａ地区の石材分布調査

１．調査地の位置と区割り

山科大塚・小山石切丁場は、京都市山科区に所在する石切丁場である。現在も、地元調査グループとともに京都橘大学が調査を進めている（山科石切場調査・研究グループ2015、京都橘大学文学部2016）。

今回の調査地は、大塚・小山石切丁場跡のうち、最も数多くの刻印石が見つかった行者ヶ森北及び北東斜面にある葭ヶ谷地区にあたる。葭ヶ谷地区は、山科区大塚の丘陵上にひろがる東群の石切丁場を指す。これは南北で地区分けされており、北側を葭ヶ谷Ａ地区、南側を葭ヶ谷Ｂ地区としている。また、行者ヶ森の丘陵斜面に見られる「角立ち四つ目結」を主とする地区は、大岩Ａ～Ｃ地区とされている（山科石切場調査・研究グループ2015）。

今回の調査は、そのうちの葭ヶ谷Ａ地区において実施した石材分布調査である。この地区は、通称「三ッ辻」地点から、昨年、京都橘大学が測量調査を行ったクレーター状平場を通り、20mほど登った所にある通称「四ッ辻」地点の東側にひろがる。この四ッ辻と小ピークを囲む東西の最大長約100m、南北約80mの範囲にある。この葭ヶ谷Ａ地区のうち、東西90m、南北90m（（Ｘ＝-113500、Ｙ＝-14740）～（Ｘ＝-113590、Ｙ＝-14665））を調査をした（図２中央、図４）。

２．調査の経過

今回の調査地である葭ヶ谷Ａ地区は、昨年測量調査を実施したクレーター状平場から急斜面を南に登った先に位置することから、平場にあった矢穴石の、石材採石地にあたる可能性が考えられた。石材の散乱範囲が大きいため、今年は2016年８月７日～10・14～17日、12月23・25日に分布調査を実施した。分布調査においては、設定した範囲内において、標高340.00～369.00mの間の地形測量を行った。その図を基にして、範囲内の石材を悉皆的に確認し、矢穴や刻印のある石材については、石材の規模と形状を実測し台帳を作成した。また、矢穴石については矢穴の寸法を計測し、矢穴台帳および矢穴の横断面形状の実測も合わせて行った。

３．調査成果

（１）石材分布調査

調査区は、葭ヶ谷Ａ地区内に設定した、東西90m、南北90mの範囲である。調査区内には北西から南東へ山道が通っており、この道の西側に多くの石材が散布している。また、刻印石が２石、刻印が３つ確認できる。その周囲に矢穴石や自然石が広がっており、露頭しているだけで、およそ400石の石材の散布が確認され、その内、一割ほどの31石に矢穴が見られた（図４、表２・３）。

まず、地形では測量図の南西角あたりがこの地区の最も標高の高い地点でT.P.369.00m前後となる。そこから東と北西と西の方向に尾根がのびている。この内、西側は尾根を境に西方側の別の谷に石材を落としていることから、今回の調査区からは除外した。

尾根の頂部は、比較的等高線が緩やかとなっており、特に刻印石である２つの巨石付近やその上部は石材がまとまっている。刻印をもつ石は切り出すための石材とは考えにくく、等高線の状況からも根元は比較的にもとの地形を残しているものと考えられる。ところが、刻印石の北側には、等高線が西北西に開く窪み状に落ちる場所があり、人為的な掘削が行われていた可能性がある。

刻印石の南側は、やや谷状の地形があり、そこを中心に北側に向かって矢穴石が目立って散布している。また大型の矢穴をもつ石材（No.８）付近は、T.P.363.00～365.00mの地点に位置し、東西約10m、南北約７m前後の平場状の地形となっている。そこから尾根のピークまでの斜面地にはNo.９～12の石材がまとまる。

以上のことから、尾根の高い地点から刻印石付近を残して、その北、南と南西尾根側が人為的な掘削によって３ヶ所の谷場と平場状の石加工場が設けられたと考える（図４）。No.８付近の平坦面は、採石によってつくられた、両側の谷筋に石材を搬出する作業場と考えられる。そして、尾根の高い地点ほど残石が表層に多く残っていることから、大規模な採石が行われた最も新しい段階の状況が残っている可能性がある。

一方、北側の谷状の最も高い尾根筋には、ブロック状に風化したクラックがある岩脈が残る。この下方にもともとあった露岩について、摂理面を利用して採石したものの残石部分の可能性がある。そうであれば、現状残る露岩が採取した石材の形状と大きさの手がかりとなる。北谷場の高所北側では70×60cm、120×60cm、西側では80×80cm、150×70cmの大きさのブロック状摂理が

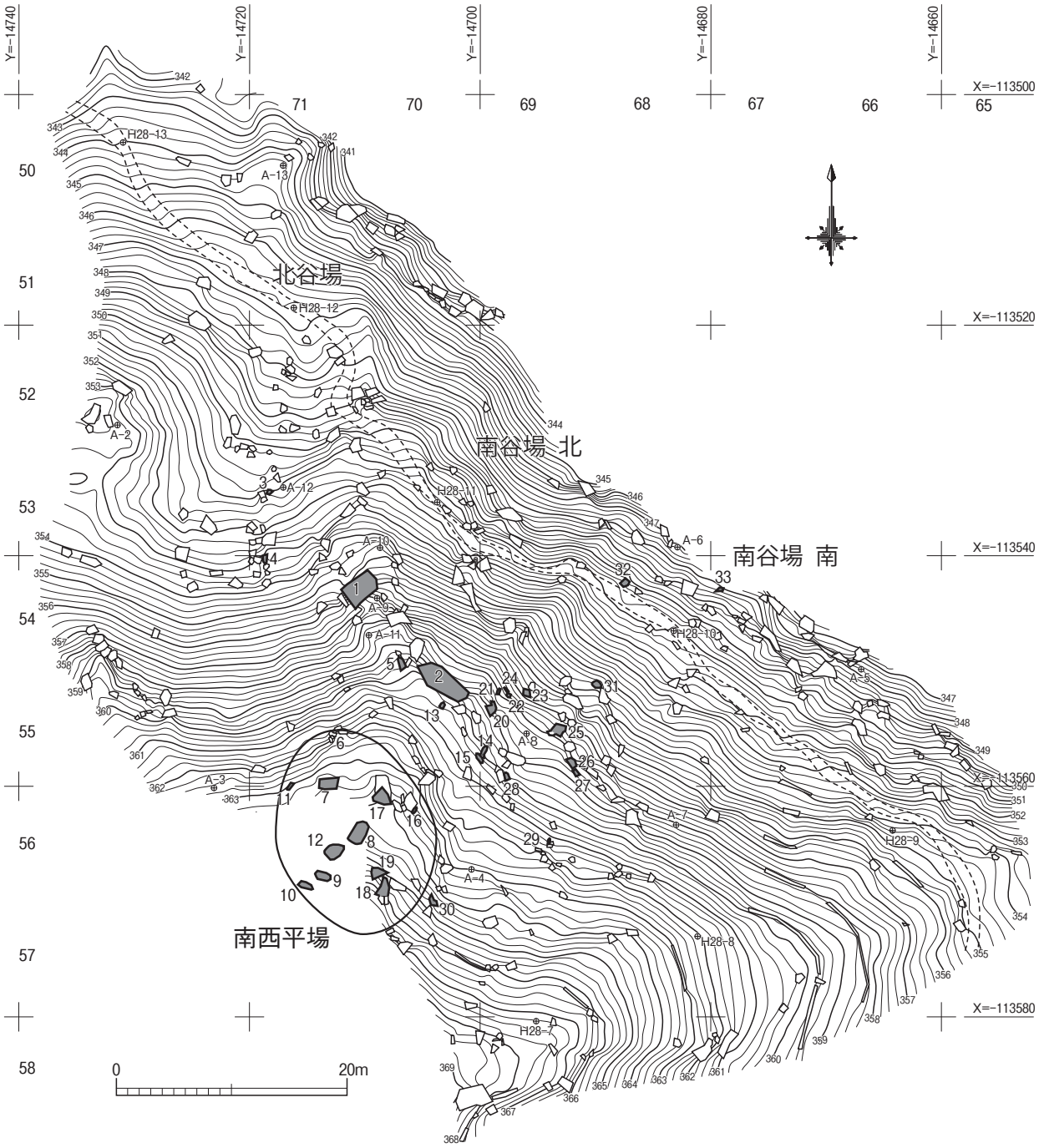


図 4　葭ヶ谷Ａ地区の地形図刻印・矢穴石分布

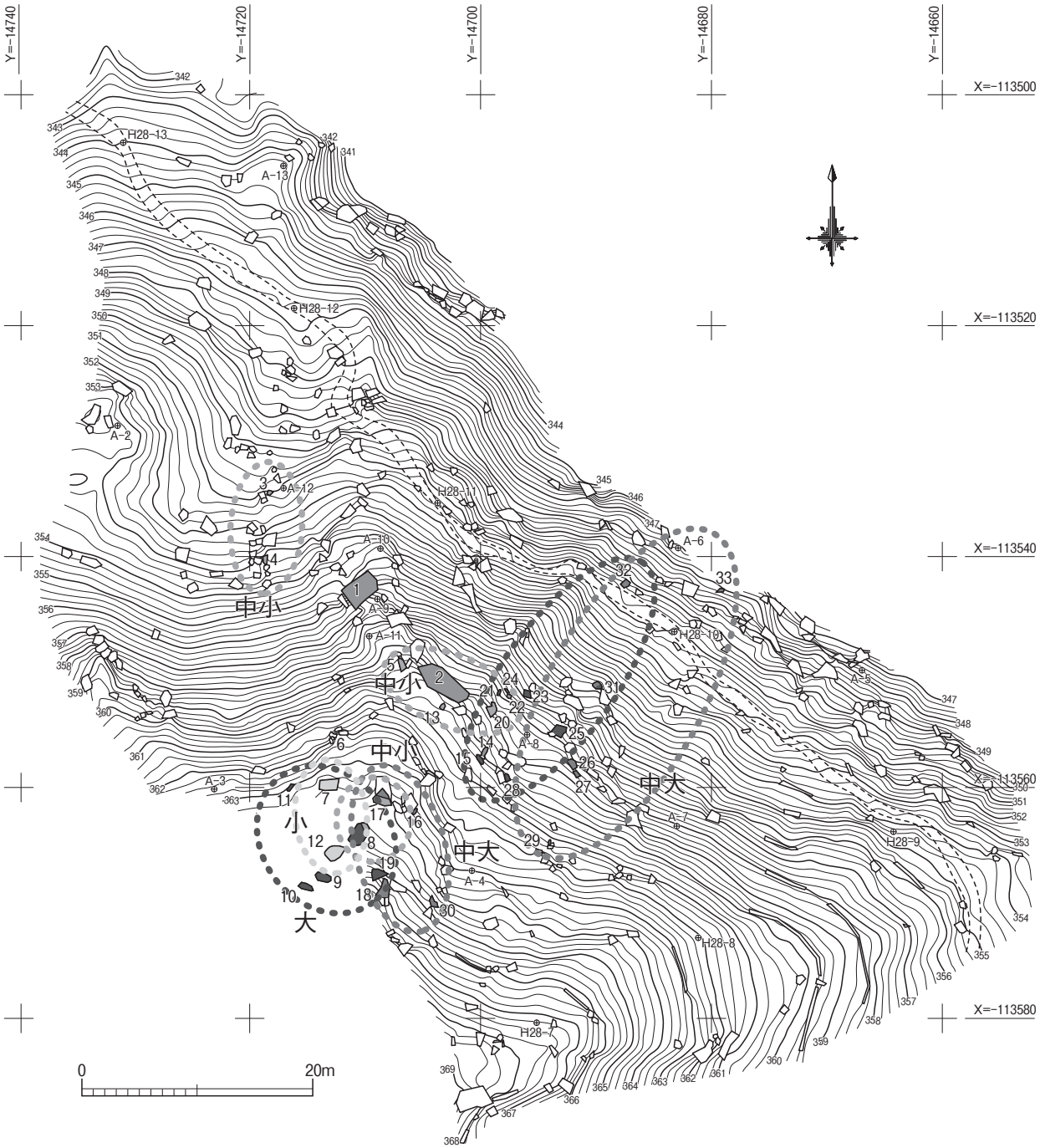


図５　矢穴形状からみた採石状況（葭ヶ谷Ａ地区）

表２　葭ヶ谷Ａ地区　石材法量一覧（座標はGarminによる）

No.	石の法量（縦×横×奥行）	座標			備考	
		緯度	経度	標高	備考	仮番号
1	2m70cm×3m40cm×2m	X=34° 58′ 34.9″	Y=135° 50′ 20.1″	356m	刻印「一○に二」	5471-3
2	4m70cm×2m80cm×2m	X=34° 58′ 34.9″	Y=135° 50′ 20.4″	368m	刻印「一○に二」、刻印「一○」	5570-4
3	46.0cm×21.0cm×28.5cm	X=34° 58′ 35.4″	Y=135° 50′ 19.6″	351m		5371-1
4	27.0cm×73.0cm×31.0cm	X=34° 58′ 35.0″	Y=135° 50′ 19.6″	350m		5471-2
5	20cm×239cm×222cm	X=34° 58′ 35.0″	Y=135° 50′ 20.2″	361m		5470-a
6	133.0cm×117.0cm×78.0cm	X=34° 58′ 34.7″	Y=135° 50′ 20.0″	358m		5571-1
7	108.0cm×152.0cm×10.0cm	X=34° 58′ 34.2″	Y=135° 50′ 20.2″	365m		5671-1
8	79.0cm×214.0cm×77.0cm	X=34° 58′ 24.6″	Y=135° 50′ 20.2″	357m	矢穴列２列あり。	5671-2
9	97.0cm×123.0cm×91.0cm	X=34° 58′ 34.3″	Y=135° 50′ 20.1″	366m		5671-3
10	113.0cm×217.5cm	X=34° 58′ 34.4″	Y=135° 50′ 20.0″	366m		5671-4
11	27.9cm×49.0cm×24.9cm	X=34° 58′ 34.7″	Y=135° 50′ 20.0″	357m		5671-5
12	76.0cm×114.5cm×19.5cm	X=34° 58′ 34.3″	Y=135° 50′ 19.9″	359m		5671-a
13	52.0cm×49.5cm×79.5cm	X=34° 58′ 34.8″	Y=135° 50′ 20.2″	368m		5570-1
14	27.3cm×41.5cm×7.2cm	X=34° 58′ 34.7″	Y=135° 50′ 20.4″	365m		5570-2
15	18.0cm×95.0cm×34.0cm	X=34° 58′ 34.7″	Y=135° 50′ 20.4″	365m		5570-3
16	16.0cm×58.4cm×8.8cm	X=34° 58′ 34.5″	Y=135° 50′ 20.1″	370m		5670-1
17	122.4cm×141.6cm×88.3cm	X=34° 58′ 34.7″	Y=135° 50′ 20.0″	370m	矢穴列２列あり。	5670-2
18	128.5cm×104.0cm×122.5cm	X=34° 58′ 34.2″	Y=135° 50′ 20.2″	365m		5670-3
19	130.0cm×144.0cm×72.0cm	X=34° 58′ 34.2″	Y=135° 50′ 20.2″	366m		5670-4
20	76.0cm×100.0cm×83.0cm	X=34° 58′ 34.9″	Y=135° 50′ 20.4″	365m		5569-1
21	17.0cm×83.0cm×18.0cm	X=34° 58′ 35.0″	Y=135° 50′ 20.5″	363m	矢穴列２列あり。	5569-2
22	14.0cm×44.5cm×23.0cm	X=34° 58′ 34.8″	Y=135° 50′ 20.6″	366m		5569-3
23	21.0cm×115.5cm×46.5cm	X=34° 58′ 34.9″	Y=135° 50′ 20.5″	366m		5569-4
24	62.5cm×29.9cm×14.0cm	X=34° 58′ 34.4″	Y=135° 50′ 20.5″	369m		5669-a
25	32.2cm×28.9cm×10.5cm	X=34° 58′ 34.9″	Y=135° 50′ 20.7″	373m		5569-5
26	18.5cm×20.1cm×3.0cm	X=34° 58′ 34.6″	Y=135° 50′ 20.9″	373m		5569-6
27	7.8cm×11.2cm×13.2cm	X=34° 58′ 34.5″	Y=135° 50′ 20.9″	373m		5569-7
28	16.5cm×25.2cm×10.2cm	X=34° 58′ 34.7″	Y=135° 50′ 20.5″	379m		5569-8
29	31.0cm×64.0cm	X=34° 58′ 35.0″	Y=135° 50′ 20.4″	364m		5569-a
30	43.2cm×109.0cm×57.0cm	X=34° 58′ 34.5″	Y=135° 50′ 20.3″	363m		5770-1
31	20.0cm×47.5cm×10.0cm	X=34° 58′	Y=135° 50′		矢穴列２列あり。	5568-1
32	72.5cm×115.0cm×75.0cm	X=34° 58′ 35.0″	Y=135° 50′ 20.8″	355m	矢穴列５列あり。	5468-1
33	70.0cm×39.0cm×28.5cm	X=34° 58′ 35.3″	Y=135° 50′ 21.2″	344m		5467-1

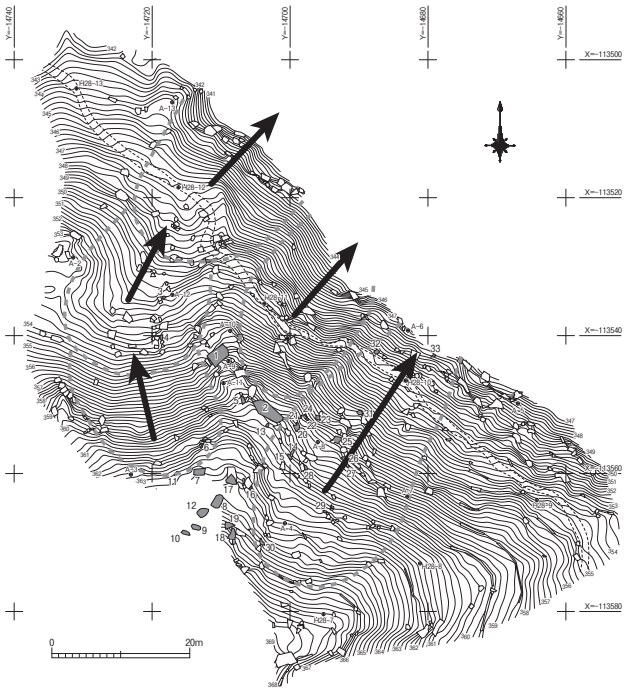


図６　地形からみた採石状況（葭ヶ谷Ａ地区）

多い。一方、尾根稜線上にある南の露岩では70×60cm、90×80cmが多い。最も大きいものでは、250×130cmがある。

（２）矢穴の調査

石材の調査と合わせて、矢穴石については矢穴の計測を行い、矢穴台帳を作成した。矢穴はほとんどが分割による石割りによって残されたものである。そのため、まずは縦断面の計測により、上辺と下辺の大きさから４つの形態にわけた。

①矢穴大　＝上辺（10～15cm程度）と下辺（５～11.5cm程度）、全体に大きいもの

②矢穴中大＝上辺（９～10.5cm程度）と下辺（５～8.5cm程度）、中程度のもの

③矢穴中小＝上辺（７～8.5cm程度）と下辺（３～６cm程度）、中程度のもの

④矢穴小　＝上辺（５～６cm程度）と下辺（３～

表３　葭ヶ谷Ａ地区　矢穴法量一覧

石材No.	列	矢穴					備考	
		縦断面		横断面		深さ	備考	仮番号
		上辺	下辺	上辺	下辺			
3		8.0cm	4.5cm	1.5cm以上	1.0以上	5.5cm		5371-1
4		7.0cm	3.0cm	3.0cm以上	0.3cm以上	4.0cm		5471-2
5		8.0cm	5.5cm	2.5cm以上	1.0cm以上	9.0cm		5470-a
6		5.0cm以上		4.0cm以上				5571-1
7		5.8cm		2.0cm以上				5671-1
8	A	13cm	7.8cm	6.0cm	3.5cm	14cm	横断面あり。	5671-2
	B	8.5cm	6.0cm	3.0cm	1.0cm	7.9cm	横断面あり。	
9		11.0cm	6.0cm	3.0cm以上	1.0cm以上	9.5cm		5671-3
10		12.4cm	10.3cm	4.7cm以上	4.4cm	6.3cm	横断面あり。	5671-4
11		11.2cm	5.0cm	3.0以上		9.4cm		5671-5
12		5.5cm	3.5cm	2.0cm以上	0.5cm以上	5.0cm		5671-a
13		8.5cm	4.5cm	2.0cm以上	1.5cm以上	4.5cm		5570-1
14								5570-2
15		14cm	7.0cm	5.0cm	2.7cm	6.0cm	横断面あり。	5570-3
16		9.0cm	8.0cm			7.2cm		5670-1
17	A	7.5cm	5.0cm			10.0cm		5670-2
	B	10.0cm		4.5cm以上				
18		10.0cm		5.0cm		8.0cm	掘削途中？	5670-3
19		12.0cm		6.0cm		4.5cm	掘削途中？	5670-4
20		7.0cm	5.0cm	2.5cm以上	1.0cm以上	6.5cm		5569-1
21	A	9.0cm	8.5cm	4.8cm	1.9cm	6.5cm	横断面あり。	5569-2
	B	11.5cm	8.0cm	1.0cm以上	1.0cm以上	11.0cm		
22		8.5cm	6.0cm	1.0cm以上	0.5cm以上	9.0cm		5569-3
23		10.0cm	9.0cm	5.0cm以上	1.7cm	7.0cm	横断面あり。	5569-4
24		10.5cm	8.0cm	1.5cm以上	0.5cm以上	8.0cm		5669-a
25		10.0cm	7.5cm	5.5cm	2.6cm	1.8cm	横断面あり。	5569-5
26		8.0cm	7.0cm	2.0cm以上		6.0cm		5569-6
27		10.0cm	8.0cm	4.0cm以上		8.0cm		5569-7
28		11.0cm	9.0cm	3.0cm以上	2.0cm以上	7.0cm		5569-8
29		10.0cm	6.0cm					5569-a
30		10.5cm	7.0cm	4.5cm以上	1.2cm以上	8.7cm		5770-1
31	A	10.0cm	8.0cm	2.5cm以上	1.5cm以上	6.0cm		5568-1
	B	10.0cm	9.5cm	1.5cm以上		9.5cm		
32	A	13.0cm	12.0cm	6.0cm	2.5cm以上	10.5cm		5468-1
	B	15.0cm	11.5cm	7.0cm	3.0cm	12.0cm		
	C	8.0cm	6.5cm	0.5cm以上		9.0cm		
	D	10.5cm	5.5cm	3.5cm以上	2.0cm以上	7.5cm		
	E	9.0cm	6.0cm	2.0cm以上		7.0cm		
33		9.0cm	5.0cm	3.0cm以上		7.0cm		5467-1

※No.１、No.２は刻印のみで矢穴は無し。

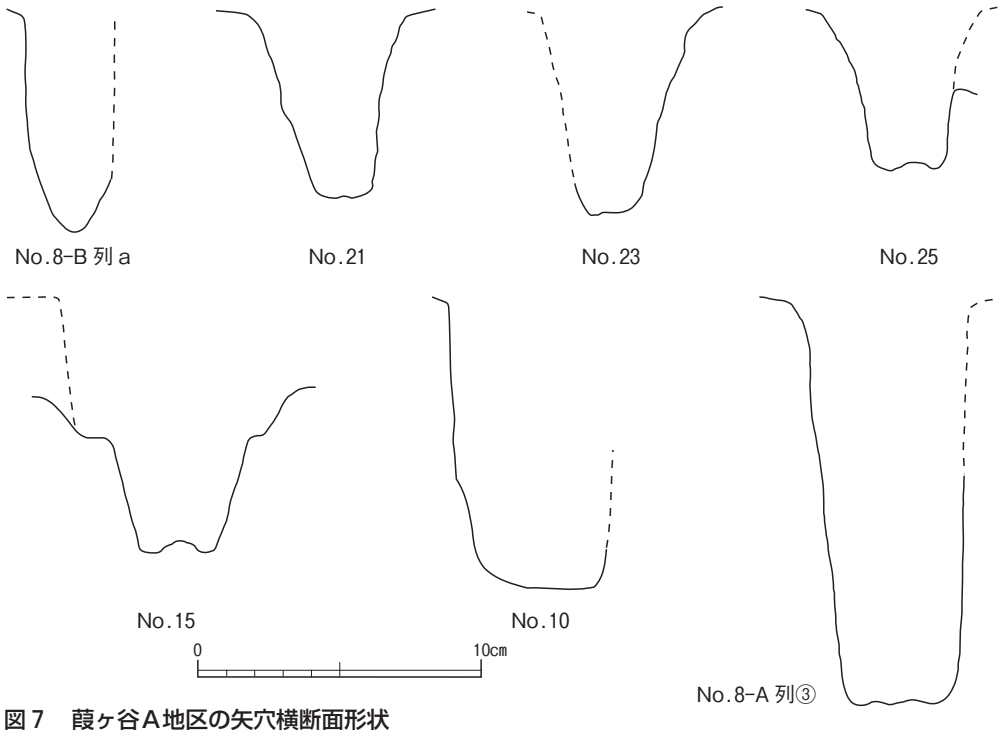


図７　葭ヶ谷Ａ地区の矢穴横断面形状

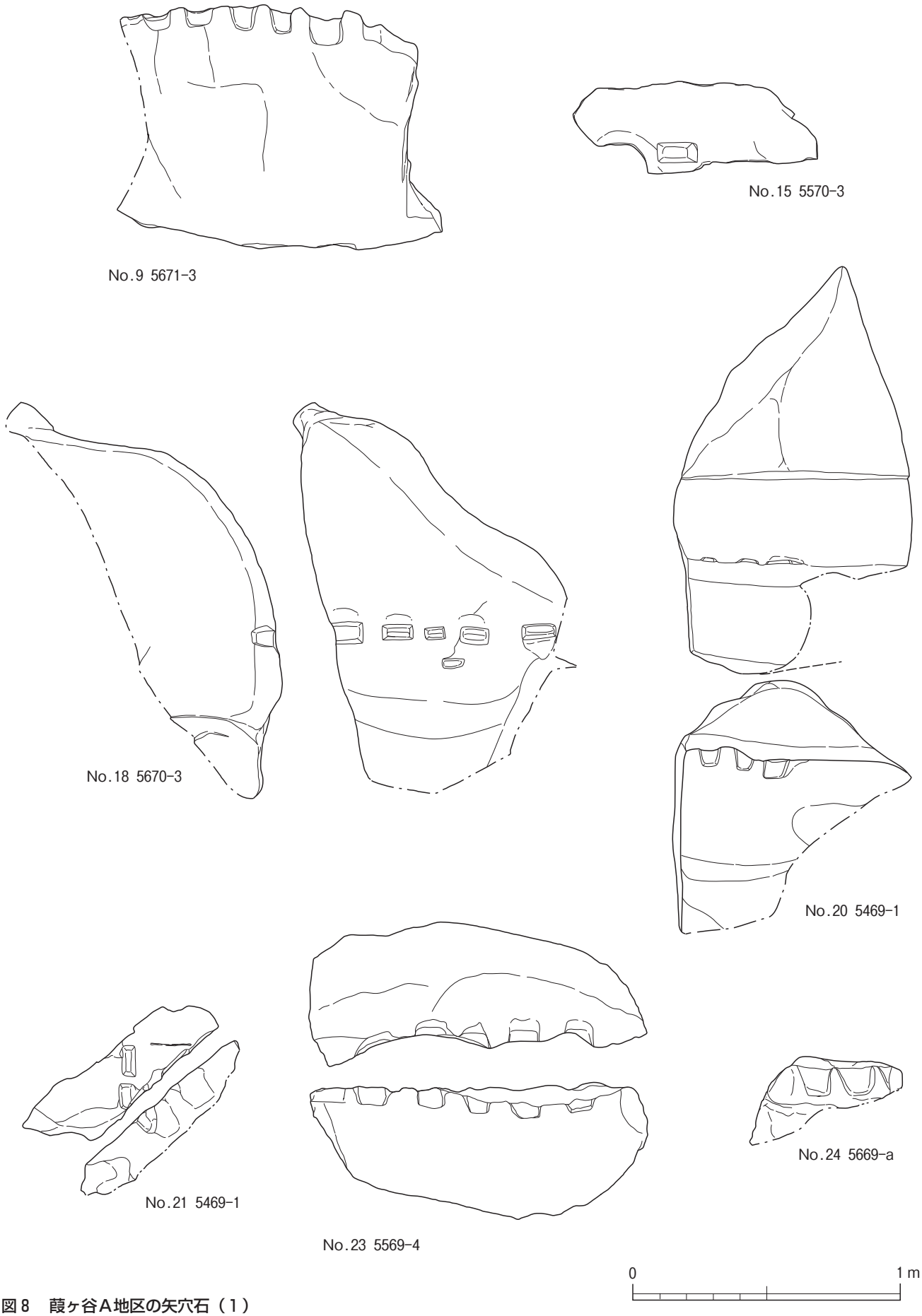


図 8　葭ヶ谷Ａ地区の矢穴石（１）

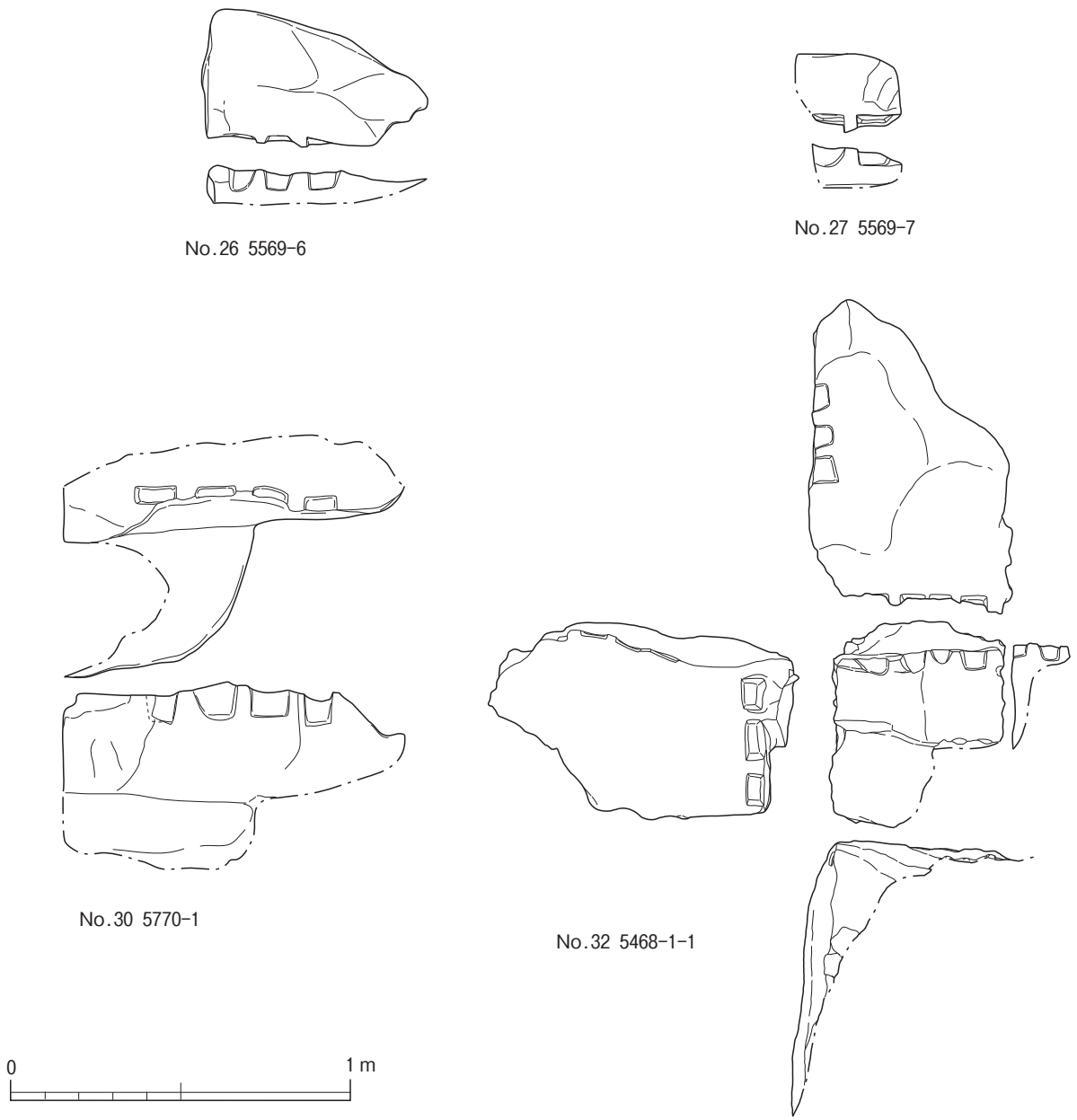


図９　葭ヶ谷Ａ地区の矢穴石（２）

4 cm程度)、小型のもの

上記の類型で石材の散布を見てみると、矢穴大は、尾根の頂部からNo. 8 の周辺のまとまりから、刻印石（No. 2 ）の南側の谷場にまとまりが見られる。矢穴中大は、同じくNo. 8付近の平場にまとまりがあり、矢穴大と同じ谷場や、それよりやや南側にまとまっている。矢穴中小も、No. 8 付近の平場に 2 石あり、刻印石（No. 2 ）付近や刻印石（No. 1 ）の北側にある谷場に分布する。矢穴小も、No. 8付近の平場に見られるが、やや北よりに散布する（図５）。

このことから、石材は、矢穴の大きさに関わらず、No. 8付近の平場付近で切石採石が行われていたことが分かる。また、矢穴大と矢穴中大は刻印石（No. 2 ）の南側の谷場、矢穴中小と矢穴小は刻印石の北側の谷場で、採石または石材の搬出に用いられた矢穴の可能性が考えられる。

これらは、森岡・藤川類型によると（森岡・藤川2008)、大きさだけでなく、縦断面形状の矢底が隅丸となるもの（古Ａタイプ）から角のあるもの（Ａタイプ）への変化があることから、矢穴中大と矢穴中小は、古Ａタイプ、矢穴大はＡタイプのように見える。一方、矢穴の横断面形状が古い矢穴を検討する上で重要であることが指摘されており、山科大塚・小山石切丁場においても複数の矢穴形態が見られた。

写真５　刻印石No．１　5471-3

写真６　刻印石No．２　5570-4

写真７　矢穴石No．３　5371-1

写真８　矢穴石No．４　5471-2

写真９　矢穴石No．５　5470-a

写真10　矢穴石No．６　5571-1（１）

写真11　矢穴石No. 7　5671-1（2）

写真12　矢穴石No. 8　5671-2

写真13　矢穴石No. 9　5671-3

写真14　矢穴石No.10　5671-4

写真15　矢穴石No.13　5570-1

写真16　矢穴石No.11　5671-5

写真17　矢穴石No.12　5671-a

写真18　矢穴石No.14　5570-2

写真19　矢穴石No.15　5570-3

写真20　矢穴石No.16　5670-1

写真21　矢穴石No.17　5670-2

写真22　矢穴石No.18　5670-3

写真23　矢穴石No.19　5670-4

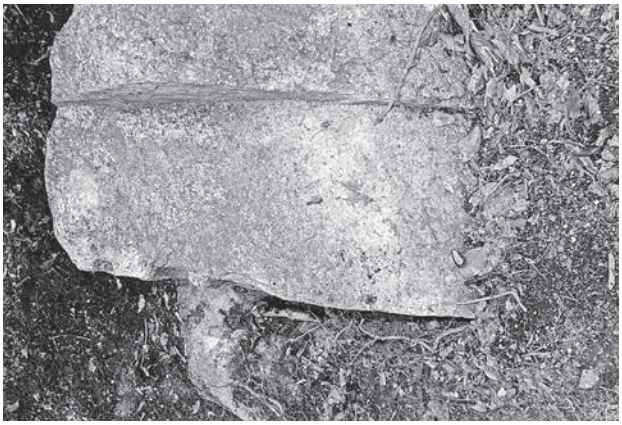


写真24　矢穴石No.20　5569-1

写真25　矢穴石No.21　5569-2

写真26　矢穴石No.22　5569-3

写真27　矢穴石No.23　5569-4

写真28　矢穴石No.24　5669-a

写真29　矢穴石No.25　5569-5

写真30　矢穴石No.26　5569-6

写真31　矢穴石No.27　5569-7

写真32　矢穴石No.28　5569-8

写真33　矢穴石No.29　5569-a

写真34　矢穴石No.30　5770-1

写真35　矢穴石No.31　5568-1

写真36　矢穴石No.32　5468-1（1）

写真37　矢穴石No.32　5468-1（2）

写真38　矢穴石No.33　5467-1

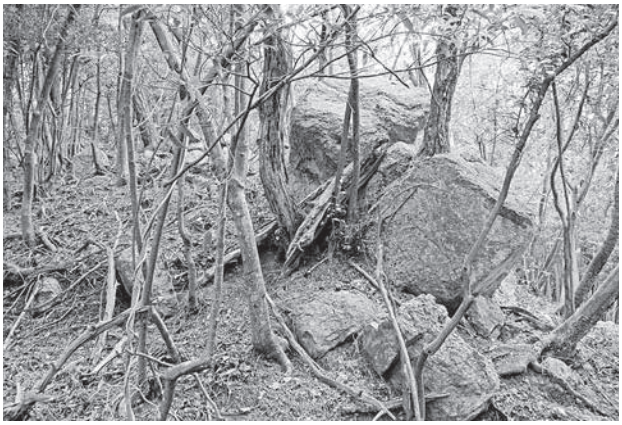


写真39　尾根筋稜線上A-2付近の残石？（北より）

写真40　ブロック状風化岩脈（北より）

写真41　ブロック状風化岩脈（北東より）

写真42　北谷場（北西より）

写真43　北谷場（南西より）

写真44　北谷場（南東より）

写真45　北谷場（南東より）

写真46　北谷場（東より）

写真47　南谷場北下（南西より）

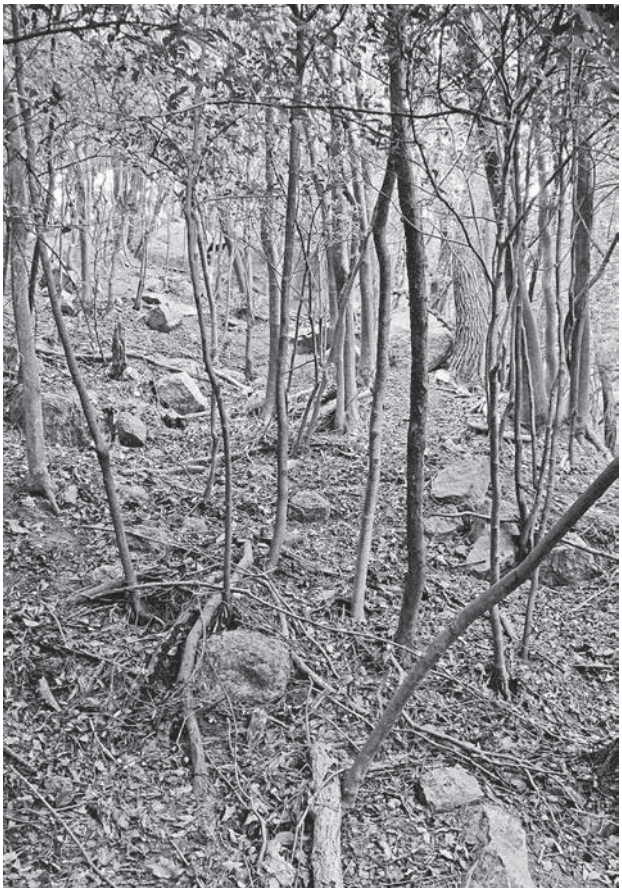


写真48　南谷場南（東より）

以下、矢底が残存する矢穴を実測した成果をもとにまとめてみた（図７～９）。

①矢底１列タイプ（No. 8 － B列）

矢底を１列のノミ痕でつくっている。横断面の上辺は3.0cm、下辺は1.0cmで、「Ｖ」の字に近い形状である。調査区ではNo. 8 － B列に見られ、他の地区でも数例が確認できた。

②矢底２列タイプ（No.21・23）

矢底を２列のノミ痕でつくっている。横断面の上辺は5.0cm前後、下辺は1.7～1.9cmで、逆台形状である。調査区ではNo.21とNo.23に見られた。

③矢底幅広タイプ（No. 8 － A列・10・15・25）

矢底の両端にノミ痕があり、中央を未成形もしくは簡易な成形でつくっている。横断面の上辺は5.0～6.0cm、下辺は2.6～4.4cmで、「コ」の字に近い形状である。調査区ではNo. 8 － A列・10・15・25に見られた。

これらの横断面形状の違いは、矢底の幅が広くなるにつれて新しくなることが指摘されている（高田2016）。今回の調査区で見られた矢穴の形状も、おそらく矢底１列タイプ、矢底２列タイプ、矢底幅広タイプの順に新しくなると想定される。これらに先行して、横断面形は「U」の字とロート状のものが古いと位置づけ得るが、今回の調査では確認できない。

以上のように、矢穴の縦断面、横断面の両要素から矢穴を見てみると、丘陵の下から上へと採石地点を移動させていったようである。

４．ま と め

今回の調査は、石材の採石地の１つに推定される葭ヶ谷Ａ地区における石材の散布状況を把握する目的で実施した。

その結果、地形の状況から石材の採掘坑と考えられる人為的な掘削の痕跡が確認でき、それらと窪みや谷状の地形に石材が集中して分布することが判明した。また、尾根の高い地点には比較的大型の矢穴石が残存していることや、廃土山状の土砂の堆積などから、総じて北側の下方から順次採石を進めていったようである。

合わせて行った矢穴の調査では、矢穴の縦断面と横断面の形状による石材の分布を検討し、これまで複数の時代の矢穴石が混在し、複雑であった状況が整理できた。

特に、No. 8付近の平場の採石が継続的である。刻印石（No. 2）の南北でおそらく時期の異なる採石や石材搬出があることなどが確認できた。

昨年に続き、山科大塚・小山石切丁場における遺跡の実態について、わずかではあるが、手掛かりとなる基礎資料を得ることができた。本年度はこの調査区の北側にあるクレーター状平場の京都市による調査にも参加した。この場で石割作業を行っていることが分かった。詳細の報告は京都市のものに委ねるが、今後も調査範囲をひろげていくことで、採石状況や搬出ルートなどが明らかになることが期待される。

参考文献

京都橘大学文学部　2016『京都橘大学歴史遺産調査報告2015』

高田祐一　2016「採石・加工技術研究における研究方法」『第３回中世採石・加工技術研究会発表資料集』中世採石・加工技術研究会

森岡秀人・藤川祐作　2008「矢穴の型式学」『古代学研究』180号　古代学研究会

山科石切場調査・研究グループ　2015『伏見城関連の石切場について―「豊徳」期における石垣石材調達をめぐる所見の二、三―』

第４章

御香宮神社内刻印石について

１．御香宮神社

御香宮神社は京都市伏見区にある神社である。はじめは「御諸神社」と称したが、862（貞観４）年に境内より良い香りの水が湧き出し、その水を飲むと病が治ったので、時の清和天皇から「御香宮」の名を賜った。豊臣秀吉は伏見城築城の際に、この御香宮神社を城内に移し、鬼門の守護神とした。後に徳川家康によって元の位置に戻され、本殿が造営された。表門は旧伏見城の大手門を移築したものとされている。

２．御香宮神社参道の刻印石

さて、現在の御香宮神社では旧伏見城から採取された

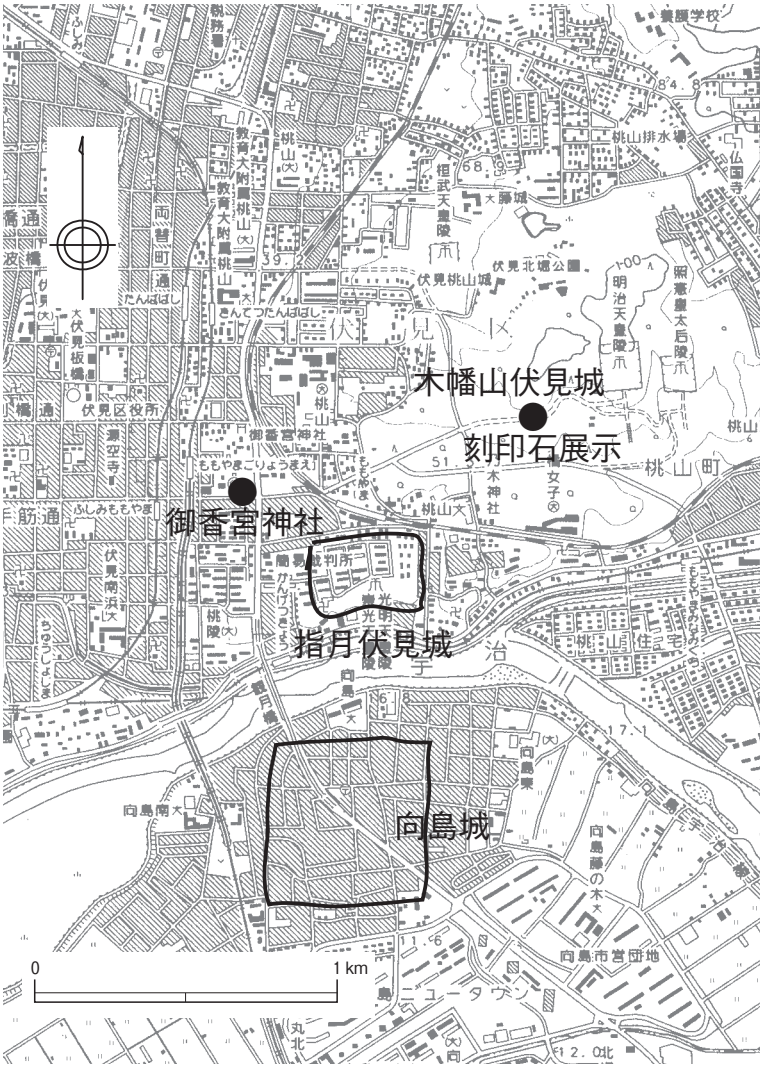


図10　御香宮神社位置図

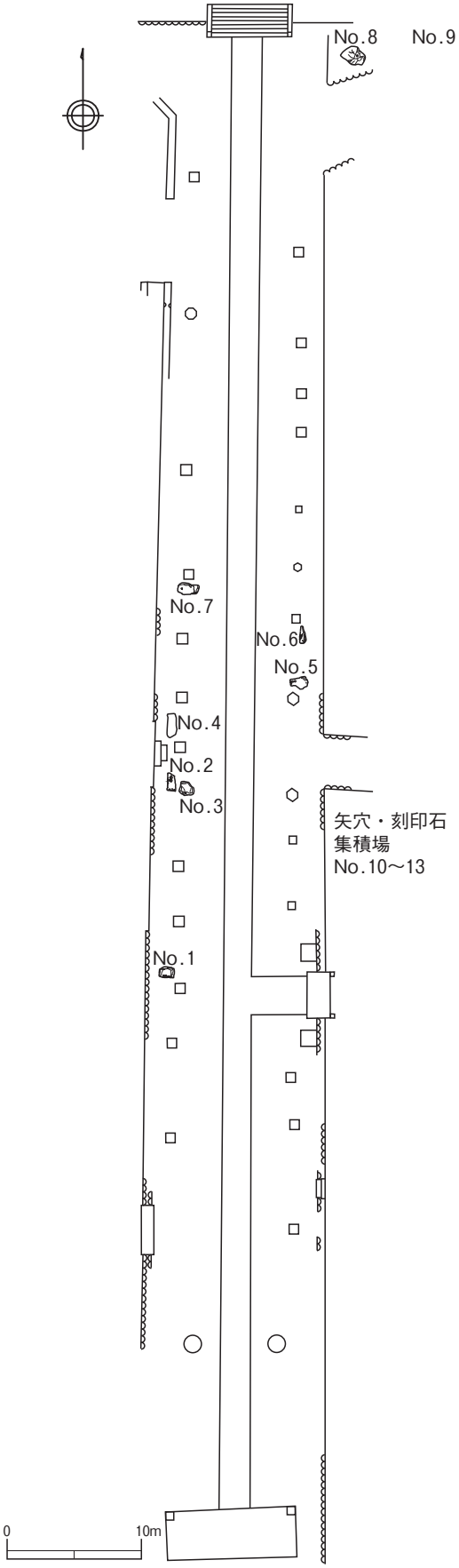


図11　御香宮神社境内参道

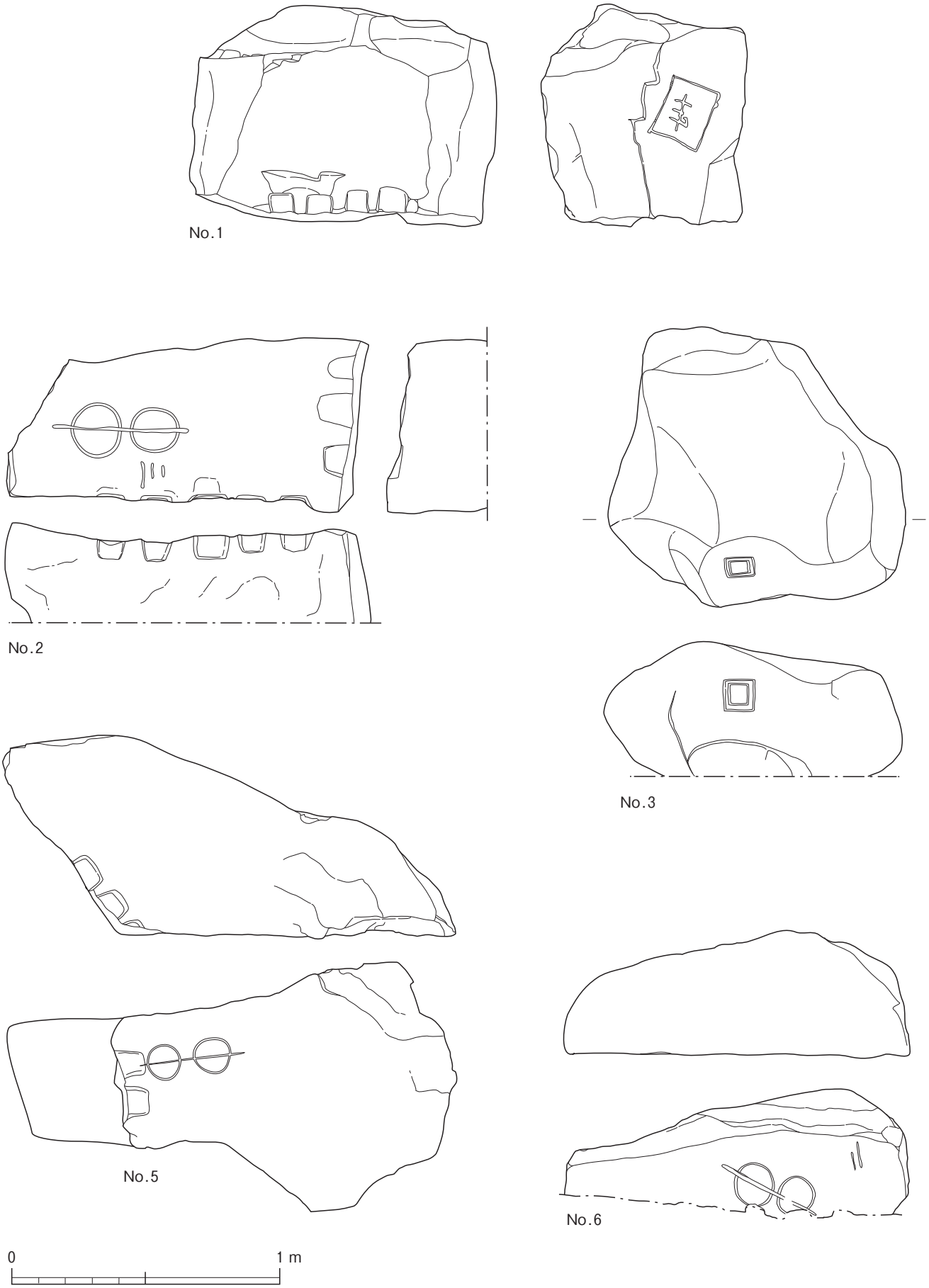


図12　御香宮神社刻印石（1）　No.1～3・5・6

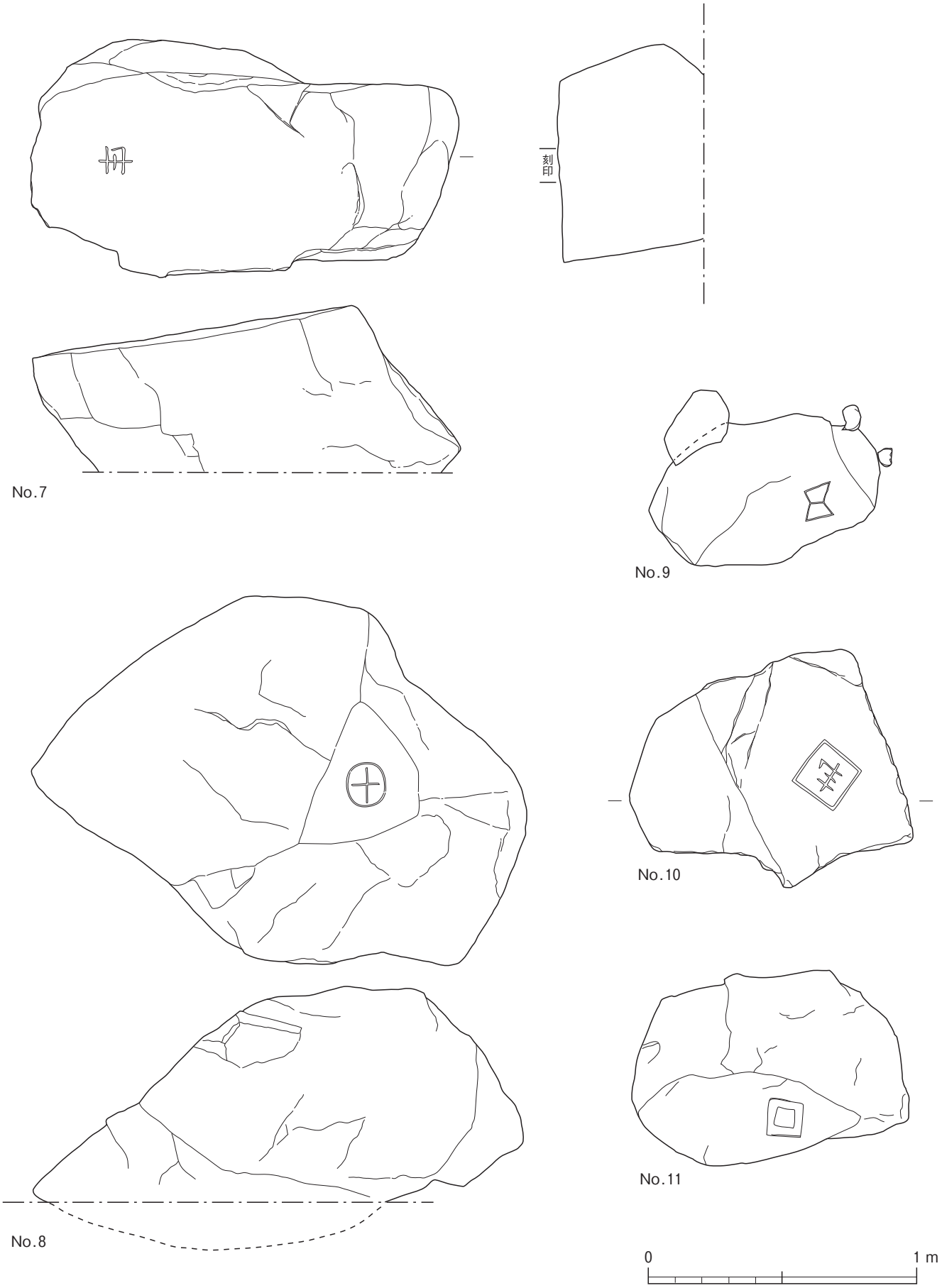


図13　御香宮神社刻印石（２）　No. 7～11

写真49　御香宮神社　参道西脇（南より）

写真50　御香宮神社　参道東脇（南西より）

写真51　御香宮神社　参道東西方向石垣（南西より）

写真52　No. 1 刻印　「丹」　中央左

写真53　No. 1 刻印　「丹」

写真54　No. 2 刻印　「串団子」　中央

写真55　No. 3 刻印　「二重四角」　中央

写真56　No. 5 刻印　「串団子」　中央

写真57　No. 6 刻印 「串団子に二」 中央左

写真58　No. 7 「丹」中央左

写真59　No. 8 刻印 「十に○」 上

写真60　No. 9 刻印 「鼓形」 中央右下

写真61　No. 9 刻印 「鼓形」

写真62　No.10刻印 「□に丹」 中央左

写真63　No.10刻印 「□に丹」

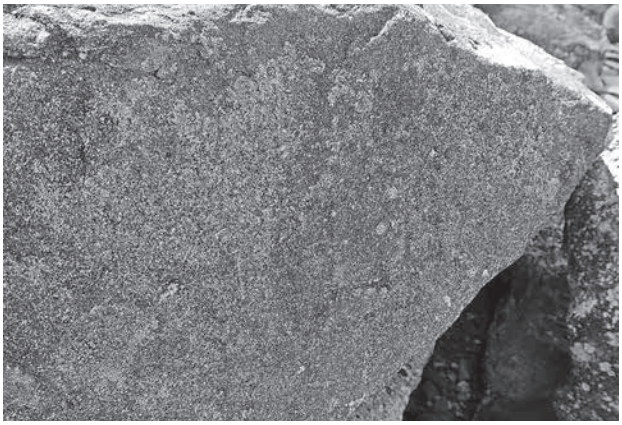


写真64　No.11刻印 「二重四角」

写真65　No.12刻印　「○に大」　中央下

写真66　No.12刻印　「○に大」

写真67　No.13刻印　「二重丸」　中央

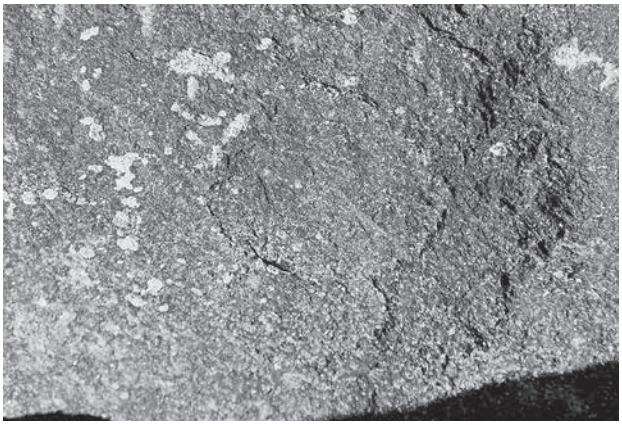


写真68　No.13刻印　「二重丸」　中央

表４　御香宮神社刻印石一覧（座標はGarminによる）

石材番号	調査区	刻印名	刻印の法量（縦/横）	石材	石材の法量（縦×横×奥行）他	座標		
						緯度	経度	高度
No. 1		四角に丹	19cm/22cm	石英斑岩	79cm×70cm×108cm	X=34° 56′ 00.5″	Y=135° 46′ 02.8″	53m
No. 2		串団子　三	21cm/49cm	黒雲母花崗岩	121cm×65cm×36.5cm	X=34° 56′ 01.1″	Y=135° 46′ 02.6″	37m
No. 3		二重四角	辺13cm	花崗斑岩	56cm×105cm×83cm	X=34° 56′ 01.0″	Y=135° 46′ 02.7″	83m
No. 5		串団子	13.5cm/41cm	片麻状黒雲母花崗岩	77cm×154cm×87cm	X=34° 56′ 01.2″	Y=135° 46′ 03.0″	40m
No. 6		串団子	15cm/40cm	片麻状黒雲母花崗岩	45cm×135cm×45cm	X=34° 56′ 01.4″	Y=135° 46′ 02.9″	41m
		二	6cm/9cm					
No. 7		丹	12.5cm/11cm	石英斑岩	69cm×157cm×79cm	X=34° 56′ 01.5″	Y=135° 46′ 02.7″	39m
No. 8		丸に＋	14cm/15.5cm	石英斑岩	83cm×112cm×93cm	X=34° 56′ 02.4″	Y=135° 46′ 03.1″	43m
No. 9		鼓形	12cm/8cm	花崗斑岩	58cm×81cm	X=34° 56′ 02.6″	Y=135° 46′ 03.4″	42m
No.10		四角に丹	辺19cm	花崗斑岩	95cm×135cm×97cm	X=34° 56′ 01.1″	Y=135° 46′ 03.3″	41m
No.11		二重四角	辺13cm	玢岩	46.5cm×122cm×71cm	X=34° 56′ 00.5″	Y=135° 46′ 03.1″	62m
No.12		丸に大	14cm/14cm			X=34° 56′	Y=135° 46′	
No.13		二連丸	18cm/11cm			X=34° 56′	Y=135° 46′	

とされる石が境内と周囲石垣に数多く存在する。その中でも境内参道付近では13石確認できる。参道西脇にNo.１～４・７、参道東脇にNo.５・６、参道北側の東西方向の石垣にNo.８・９、参道東中ほどに刻印・矢穴石の集積場があり、そこに少なくともNo.10～13の刻印石が位置する（図10）。彫られている刻印の種類は、丹、串団子、二重四角、丸に大、丸に十、鼓形、二連丸の７種類である。石材の種類は主に石英斑岩と花崗斑岩があり、山科からの可能性が高いものも多い（表４）。

丹、二重四角、丸に十、鼓形の刻印が山科からの可能性があるが、現在、山科大塚・小山石切丁場からはこれらのどの刻印も確認されていない。島津家の家紋とされる丸に十の刻印に関しては、音羽川近辺で確認された十文字刻印とつながりがあると考えられるが、今後、確認が期待される刻印と言えよう。

２．伏見桃山陵参道の刻印石など

御香宮神社の南を通る道は木幡山伏見城の大手筋であり、それを東にのぼると京都伏見区にある明治天皇の伏見桃山陵である。陵の敷地は、豊臣秀吉の築いた伏見木幡山城の本丸があったと考えられている場所である。周囲一帯は宮内庁の管理地となっており、京都市南西部から旧山陽道、旧西海道地域の陵墓を管理する宮内庁書陵部桃山陵墓管区事務所がある。

陵内で露出する石垣は自然石が主体をなし、矢穴施行率はすこぶる低く、矢穴型式は古Ａタイプ～Ａタイプ最古相であった。刻印石の確認は今のところ、わずか２例であるらしい。切石加工のある角石を中心として、精美で規格的な石材は徹底的に城外に持ち出された可能性がある。

陵墓から西へ伸びる参道は、このあたりに三ノ丸、二ノ丸、治部小丸などがあったと考えられる。この参道に端には埋設管工事の際に出した伏見城石垣の残石が展示される。そこでは７石９刻印が確認される。こうした石材が認められるものの、ここでもいびつなものが多い。しかし、まぎれもなくこれらは伏見城に用石として持ち込まれたものであろう。ここでの刻印の種類は丸に十、×、二連三角、凸と４種類である。丸に十、×、凸の刻印が山科由来の刻印と考えられ、山科大塚・小山石切丁場からはどの刻印も確認されていない。しかし、御香宮神社境内で確認できる刻印石同様、丸に十、×の刻印は山科大塚・小山石切丁場で見つかっている十文字と関係している可能性がある。

参考文献

武内良一　2015「「山科の石」について―伏見城関連　山科（大塚・小山）の石切場―（下）」『古代学研究』207号

有馬　伸　2009「桃山陵墓地下水道管布設工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第60号　宮内庁書陵部

第５章

二条城堀川沿いの石垣材について（予報）

１．はじめに

京都市の堀川沿いにある二条城の外堀の石垣材を裸眼で観察した（図14）。この石垣は徳川家康が伏見城の石垣材を移築した伝承があり、石垣材に「是ヨリ御紀州」か「是ヨリ北紀州」と読める刻印がある石もある。また、この石垣材は素割の石で、矢穴跡が多くみられ、その形状から時期が推定できる素晴らしい条件を備えている。石垣は堀川に沿っており、観察条件にも適している。今回はこの石垣の南半部の一部50ｍほどについて観察したのみである。

伏見城から移築した石材であるか、「是ヨリ御紀州」か「是ヨリ北紀州」か読み方についての判断はさておき、この地点から石材が変わるのかについては興味がもたれることである。

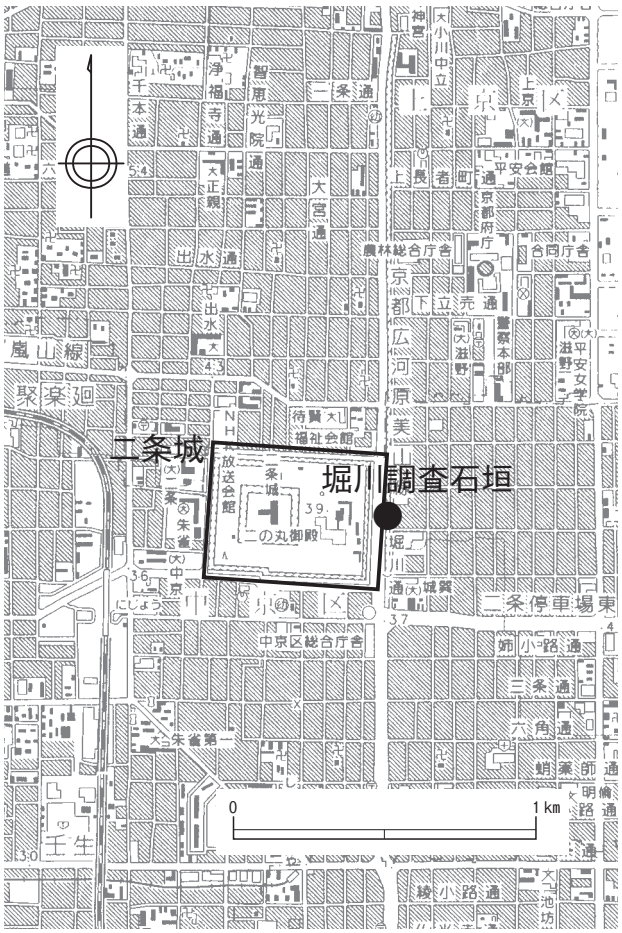


図14　二条城堀川石垣調査位置

石材に残る矢穴跡の形状から石が割られたおよその時期を判断できることから矢穴跡の観察、採石地を推定するために石材の石種とその岩相について詳細な観察をした。石材に刻まれた刻印と石種についての観察は、奥田尚・武内良一・久保　孝、石材の形状・矢穴跡についての観察は奥田が行った。以下、観察結果について述べる。

報告文は奥田が作成した。後に載せた刻印石の写真は、「是ヨリ北紀州」と彫ったものを除いて、おおむね北から存在するものから並べたものである。これら写真については京都橘大学が撮影したものである。

２．石垣材の石種と形状及びみかけの長径

観察した部分の石垣に使用されている石材439個の石種は、片麻状斑状黒雲母花崗岩Ｈが167個（38％）、斑状黒雲母花崗岩Ｔが13個（３％）、斑状花崗閃緑岩Ｔが２個（－）、斑状花崗閃緑岩Ｌが57個（13％）、斑状花崗閃緑岩Ｉが126個（29％）、片麻状黒雲母花崗岩Ｌが１個（－）、石英斑岩が28個（６％）、花崗斑岩が10個（２％）、玄武岩質凝灰岩が１個（－）、片麻状黒雲母花崗岩が１個（－）、アプライトが７個（２％）、玢岩が４個（１％）、砂岩が６個（１％）、チャートが２個（－）、黒雲母花崗岩Ｂが９個（２％）、黒雲母花崗岩Ｍが３個（１％）、ペグマタイトが２個（－）で、片麻状斑状黒雲母花崗岩Ｈ・斑状花崗閃緑岩Ｉ・斑状花崗閃緑岩Ｌで全体の67％を占める（図15、表５）。

石材を形状から、山地に転在する石を運び出したような加工がみられない石（山石）、露岩の節理面を利用して剝がしたような節理面がみられる石（剝石）、矢穴跡が残るような石（割石）、表面が滑らかな川原石様の石（川原石）に区分した。山石は78個（18％）、剝石は27個（６％）、割石は324個（74％）、川原石は10個（２％）で、割石と剝石で８割を占める。

石材の見かけの長径を20cm単位で区分した。石材は10cm以上20cm未満が35個（８％）、20cm以上40cm未満が125個（28％）、40cm以上60cm未満が56個（13％）、60cm以上80cm未満が83個（19％）、80cm以上100cm未満が67個（12％）、110cm以上120cm未満が33個（８％）、120cm以上140cm未満が26個（６％）、140cm以上160cm未満が８個（２％）、160cm以上180cm未満が６個（１％）である。在地の石と推定される川原石様の玢岩・砂岩・チャートは粒径的に小さいものが多い。

３．石材の採石推定地

二条城がある付近は平地で、石材にできるような石は丹波帯の地層から流出した砂岩や泥岩、チャート、玄武岩質凝灰岩等の径が小さい川原石である。径が40cmを超すような石となれば、露岩が分布する山地まで行かなければ採石できない。二条城近くの河川にみられるチャートや砂岩はこの付近で採石された石（在地の石）と推定されるが、他の花崗岩類は比叡山、淀川・木津川流域の南部に分布する領家帯まで、斑岩類は山科まで行かなければ採石できない石である。比叡山付近には黒雲母花崗岩が分布し、左京区の白川付近では白川石とよばれている。山科区の新幹線の音羽山トンネル付近の大塚から小山にかけての付近には石英斑岩・花崗斑岩の貫入岩体が分布する。この石は山科石とよばれている。淀川流域南部の枚方市穂谷から交野市倉治にかけての付近に角閃石が僅かに含まれる斑状花崗閃緑岩、四條畷市の飯盛山付近に角閃石が顕著な斑状花崗閃緑岩が分布し、木津川市加茂町の大野山付近から西小にかけての付近には粗粒で、赤茶色透明の石英が顕著な片麻状斑状黒雲母花崗岩、同町の岩船付近には斑状黒雲母花崗岩・斑状花崗閃緑岩が分布する。風化すれば桃色となる正長石を含む黒雲母花崗岩は瀬戸内地方の北部に分布する山陽型花崗岩で、近距離の地では西宮から東灘区御影付近にかけての六甲山付近に分布する。

以上のような花崗岩類・貫入岩体の分布とそれらの岩相比較に加え、石材の切出・運搬条件を考慮して採石地を推定した。交野市岩船にある磐船神社の御神体には加藤家の刻印があるようで、伝承によれば、石材を採石できるが、大坂城まで運ぶことができないために採石を断念したようである。片麻状斑状黒雲母花崗岩Ｈは木津川市加茂町大野山付近（加茂付近の石）、斑状花崗閃緑岩Ｔ・斑状黒雲母花崗岩Ｔは岩船から西小にかけての当尾付近（当尾付近の石）、斑状花崗閃緑岩Ｌ・片麻状黒雲母花崗岩Ｌは枚方市穂谷から交野市倉治にかけての付近（穂谷付近の石）、斑状花崗閃緑岩Ｉは四條畷市飯盛山付近（飯盛山付近の石）、石英斑岩・花崗斑岩・玄武岩質凝灰岩は山科区大塚から小山にかけての付近（大塚・小山付近の石）、黒雲母花崗岩Ｂは東山区の白川付近（白川付近の石）、黒雲母花崗岩Ｍは神戸市御影から西宮にかけての付近（御影付近の石）で採石されたと推定される。

石材の採取地と個数の関係をみれば、加茂付近に石が167個（38％）、当尾付近の石が15個（３％）、穂谷付近の石が58個（13％）、飯盛山付近の石が126個（29％）、大塚・小山付近の石が40個（９％）、白川付近の石が９個（２％）、御影付近の石が３個（１％）となり、山城南部の加茂付近、北河内の穂谷・飯盛山付近の石が３分の２を占める（表１）。

４．石材の石種と矢穴跡の形状

観察面に残る矢穴跡の形状と石種の関係について観察した。矢穴が認められる石材は観察した439個中の146個（33％）である。石種と矢穴跡がある石材の個数の関係をみれば、片麻状斑状黒雲母花崗岩Ｈが78個（53％）、斑状花崗閃緑岩Ｔが１個（１％）、斑状黒雲母花崗岩Ｔが４個（３％）、斑状花崗閃緑岩Ｌが20個（14％）、片麻状黒雲母花崗岩Ｌが１個（１％）、斑状花崗閃緑岩Ｉが37個（25％）、石英斑岩が３個（２％）、花崗斑岩が1個（１％）、黒雲母花崗岩Ｂが1個（１％）となり、加茂付近・飯盛山付近・穂谷付近の石に多く見られる。これらの矢穴跡を形状を基に区分すれば、16世紀中頃か19世紀前半頃のものが４個（３％）、天正－文禄頃のものが20個（14％）、慶長頃のものが66個（45％）、元和－寛永頃のものが56個（38％）となる。

５．石種と刻印

今回の調査では、大塚・小山付近の石と推定される石英斑岩材や花崗斑岩材に刻印を観察していないが、片麻状斑状黒雲母花崗岩Ｈ材では、元和－寛永頃の形状を呈する矢穴跡が残る石に「是ヨリ北紀州」の銘、矢穴跡が見られない石に四ツ目の刻印（京極家）がある。斑状花崗閃緑岩Ｌ材では、天正－文禄頃の矢穴跡が残る石に四ツ目の刻印（京極家）、慶長頃の矢穴跡が残る石に〇に山の刻印（山崎家）、矢穴跡が見られない石に四ツ目の刻印（京極家）、二重四角の刻印（有馬家）、二重〇の刻印（加藤家）、八の字や×印の刻印がある。斑状花崗閃緑岩Ｉ材には、元和－寛永頃の矢穴跡が残る石に六の字の刻印、矢穴跡がみられない石に二重〇の刻印（加藤家）、ハの字や×印の刻印がある。

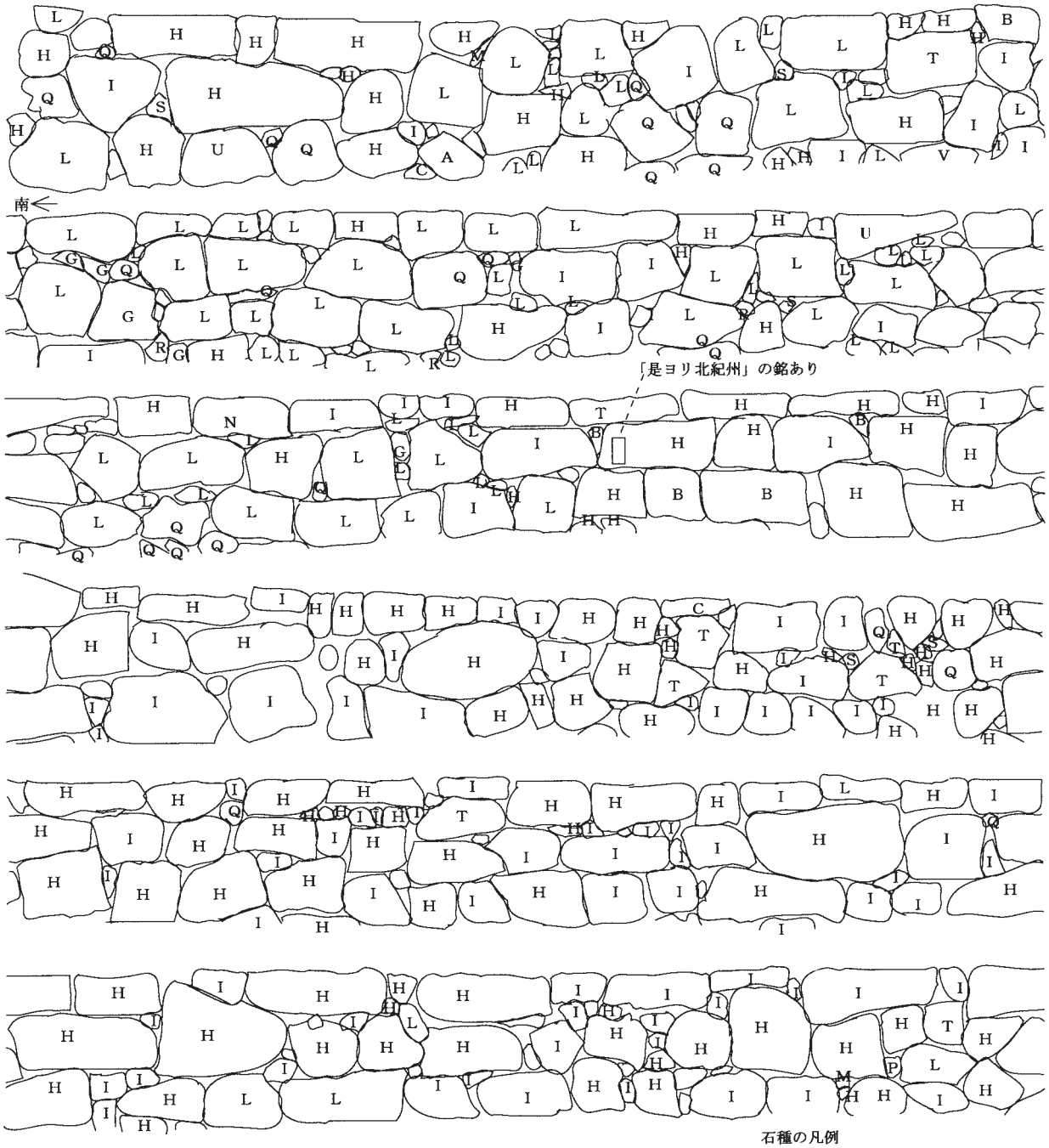
刻印と矢穴跡と石種の関係をみれば、穂谷付近で天正－文禄頃に京極家、慶長頃に山崎家が、時期が不明であるが有馬家、加藤家等も斑状花崗閃緑岩Ｌ材を採石していたことが窺える。また、加茂付近で元和－寛永頃に紀州家、時期が不明であるが京極家も片麻状斑状黒雲母花崗岩Ｈ材を採石していたことが窺える。飯盛山付近で加

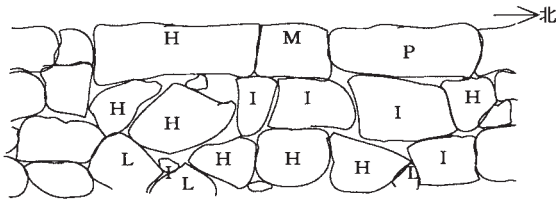
表 5　二条城堀川石垣材の石種と形状と粒径

石　　種	形状	みかけの長径（cm）									合計		採石推定地
		10～19	20～39	40～59	60～79	80～99	100～119	120～139	140～159	160～179			
片麻状斑状黒雲母花崗岩Ｈ	山石	2	4		4	4					14	167	加茂付近
	剥石		3		1		1				5		
	割石	11	27	16	24	27	12	20	6	5	148		
斑状花崗閃緑岩Ｔ	割石					2					2		当尾付近
斑状黒雲母花崗岩Ｔ	剥石	1									1	13	
	割石		3	2	3		3	1			12		
斑状花崗閃緑岩Ｌ	山石	1	6	3	2	1	1	1			15	57	穂谷付近
	剥石			1		1					2		
	割石	3	10	5	9	7	6				40		
片麻状黒雲母花崗岩Ｌ	割石					1					1		
斑状花崗閃緑岩Ｉ	山石		11	4	4	4				1	24	126	126 飯盛山付近
	剥石	2	4		1	1			1		9		
	割石	5	23	15	26	14	8	2			93		
石英斑岩	山石		7	3	4	2					16	28	大塚・小山付近
	剥石	1		2	1						4		
	割石	1	5	2							8		
花崗斑岩	山石	1	3	1							5	10	
	割石		3		1	1					5		
玄武岩質凝灰岩	山石					1					1		
片麻状黒雲母花崗岩	割石						1				1		
アプライト	山石				1		1				2	7	
	剥石		3								3		
	割石		1	1							2		
玢岩	川①		1								1	4	
	川③	1	1								2		
	割石		1								1		
砂岩	川①	1	3								4	6	在地
	川②	1									1		
	剥石		1								1		
チャート	川③		1								1	2	
	剥石					1					1		
黒雲母花崗岩Ｂ	山石	1									1	9	白川付近
	剥石				1						1		
	割石	2	2	1	1			1			7		
ペグマタイト	割石		1						1		2		
黒雲母花崗岩Ｍ	川②	1									1	3	御影付近
	割石		1					1			2		
合　　計		35	125	56	83	67	33	26	8	6	439		

表 6　二条城堀川石垣材の石種と矢穴跡の時期

石　　種	矢穴跡の形状							合計
	16Ｃ中期か19Ｃ前半	天正－文禄頃	慶長頃	元和－寛永頃	江戸中期頃	明治頃	大正－昭和頃	
片麻状斑状黒雲母花崗岩Ｈ	2	5	38	33				78
斑状花崗閃緑岩Ｔ				1				1
斑状黒雲母花崗岩Ｔ		1	3					4
斑状花崗閃緑岩Ｌ	1	7	7	5				20
片麻状黒雲母花崗岩Ｌ			1					1
斑状花崗閃緑岩Ｉ		6	16	15				37
石英斑岩	1	1		1				3
花崗斑岩			1					1
黒雲母花崗岩Ｂ				1				1
合　　計	4	20	66	56				146





石種の凡例

- B　黒雲母花崗岩B（白川付近の石）
- M　黒雲母花崗岩M（御影付近の石）
- I　斑状花崗閃緑岩Ⅰ（飯盛山付近の石）
- L　斑状花崗閃緑岩L（穂谷付近の石）
- T　斑状黒雲母花崗岩T（当尾付近の石）
- U　斑状花崗閃緑岩T（当尾付近の石）
- H　片麻状斑状黒雲母花崗岩H（加茂付近の石）
- N　片麻状黒雲母花崗岩（領家花崗岩類）
- P　ペグマタイト
- R　砂岩
- G　花崗斑岩（大塚・小山付近の石）
- Q　石英斑岩（大塚・小山付近の石）
- C　チャート（丹波層群の石）
- V　玄武岩質凝灰岩（丹波層群の石）
- S　砂岩（丹波層群の石）

図15　二条城堀川石垣材の石種

表７　二条城堀川石垣材の矢穴跡の形状と石種と銘・刻印比較

石　種	矢　穴　の　形　状					矢　穴　跡　無
	16世紀中頃	天正～文禄頃	慶長頃	元和～寛永頃	江戸中期頃	
片麻状斑状 黒雲母花崗岩Ｈ （加茂付近の石）				是ヨリ北紀州		田田 田田
斑状花崗閃緑岩Ｌ （穂谷付近の石）		田田 田田	山			田田 田田　回　◎ ハ　×
斑状花崗閃緑岩Ｉ （飯盛山付近の石）				六		◎　ハ　×
石英斑岩 （大塚・小山付近の石）						
花崗斑岩 （大塚・小山付近の石）						

藤家が斑状花崗閃緑岩Ｉ材を採石していたことが窺える。穂谷付近と飯盛山付近では二重〇やハの字、×印の刻印がみられ、同じ大名が採石していたことが窺える。

６．おわりに

石切場跡は採石途中で放置されれば矢穴跡や刻印が残る石がみられ、採石の様子を窺えるが、採石が継続しておれば採石跡は残らない。穂谷付近の石は石清水八幡宮五輪塔の地輪より上部の石材（台石は御影付近の石と推定される黒雲母花崗岩Ｍである）、飯盛山付近の石は野崎観音裏山にある十三重石層塔に使用され、これらの採石は鎌倉時代となるが、天正から元和にかけての石垣材として多量に使用されていることが明らかとなったのは始めてのことである。

また、二条城の堀川沿いの石垣について矢穴跡の形状から判断すれば、この石垣材に元和－寛永頃の矢穴跡がみられること、また、元和－寛永頃の矢穴跡がある石を補充材とするには量的に多いことから、従来の石垣材も使用して、大規模な石垣の改修が元和－寛永頃になされた可能性がある。この時期の将軍は徳川家光にあたる。

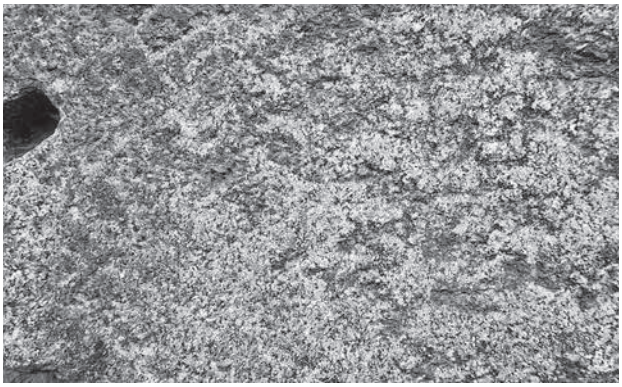


写真69　二条城堀川石垣の刻印　「平四つ目」N①（N2-1）

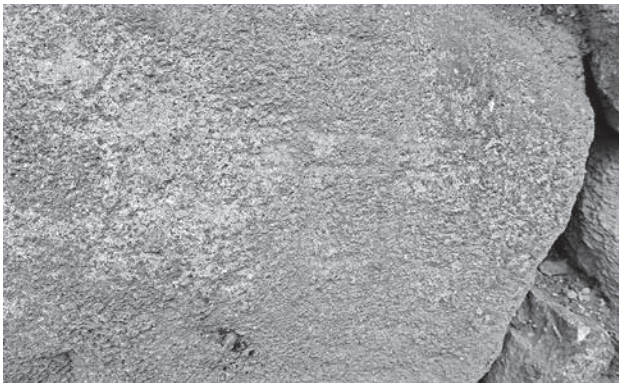


写真70　二条城堀川石垣の刻印　「平四つ目」N②（N2-1）

写真71　二条城堀川石垣の刻印　「平四つ目」N③a「四角」N③b

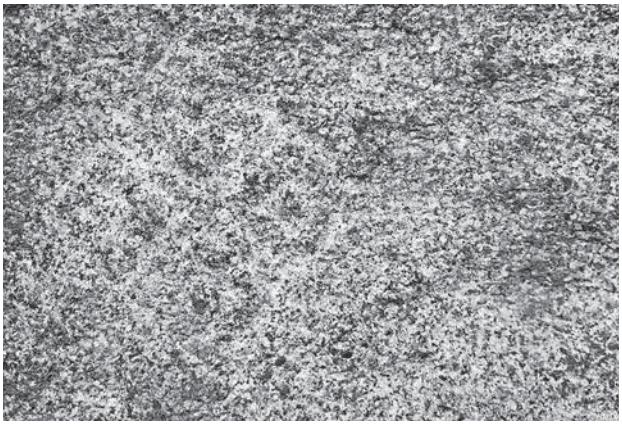


写真72　二条城堀川石垣の刻印　「角立ち四つ目」N④（N2-1）

写真73　二条城堀川石垣の刻印　「平四つ目」N⑤（N3-1）

写真74　二条城堀川石垣の刻印　「二重四角」N⑥（N3-1）

写真75　二条城堀川石垣の刻印　「四角」N⑦aと「丸」N⑦b

写真76　二条城堀川石垣の刻印　「二重丸」N⑧（N6-1）

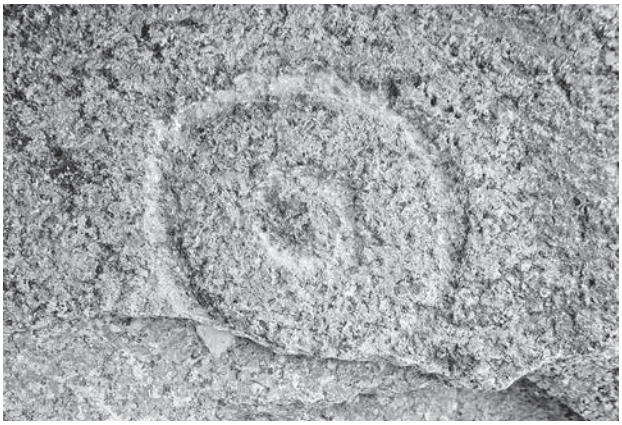


写真77　二条城堀川石垣の刻印　「二重丸」N⑨（N8-1）

写真78　二条城堀川石垣の刻印　「四つ目」N⑩（N5-1）

写真79　二条城堀川石垣の刻印　「平四つ目」N⑪（N3-1）

写真80　二条城堀川石垣の刻印　「四角」N⑫（N2-1）

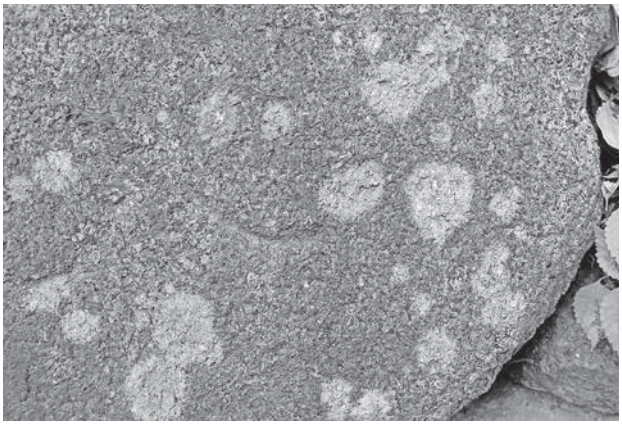


写真81　二条城堀川石垣の刻印　「八」C①（C5-1）

写真82　二条城堀川石垣の刻印　「六」C②（C10-1）

写真83　二条城堀川石垣の刻印　「山」C③（C12-1）

写真84　二条城堀川石垣の刻印　「十」S①（S3-1）

写真85　二条城堀川石垣の刻印　「逆Ｌ」S②（S8-2）

写真86　二条城堀川石垣の刻印　「鼓形」S③　「二重四角」S③a（S12-2）

写真87　二条城堀川石垣の刻印　「是より紀州」C④（C21-1）

第６章

2016年度の建造物調査

１．調査経緯

今年度の建造物調査は、夏期から秋期にかけて、大阪府泉佐野市日根野中学校区、萬明寺（滋賀県高島市）で行った。日根野中学校区の調査については、別途報告書を刊行する予定となっており、以下では、萬明寺本堂の調査について詳細に報告する。

２．萬明寺本堂の調査

（１）萬明寺について

萬明寺は、滋賀県高島市マキノ町西浜に所在する。浄土真宗本願寺派の寺院である。境内は、西浜の集落のほぼ中央、湖岸に沿って走る西近江路から少し北に入ったところに位置する。境内の東側に山門を開き、敷地中央に本堂が所在する。さらに本堂の南西には鐘楼が立つ。

当寺は、寺蔵の過去法名記によると、1532（享禄５）年に田中道場として開かれたという。開基は淳宗である。本願寺第10世宗主証如から下附された方便法身尊像の裏書きに、「享禄五年」「淳宗」とあり、これを開創時期・開基にあてていると考えられる。もとは海津天神社の西方にあり、のちに寺基を現在地へ移したと伝える（『増補高島郡誌』）。さらに、1700（元禄13）年には、14世宗主寂如から木仏を賜っていることがわかる。

堂舎の造営については、寺蔵文書などから近世後期の具体的な様相が明らかとなる。

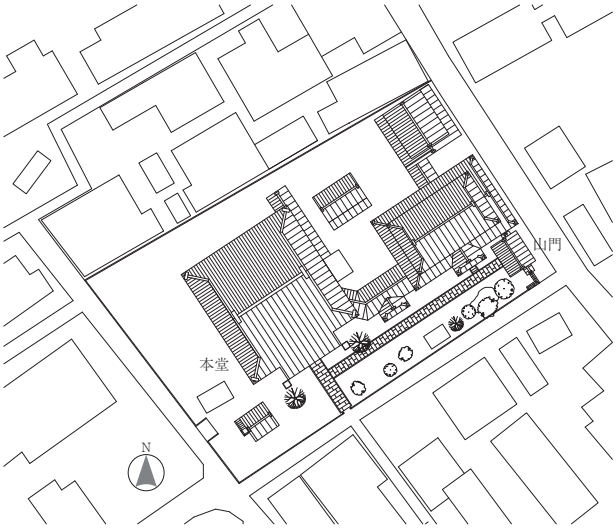


図16　萬明寺配置図

1825（文政８）年には、桁行五間、梁間四間の本堂が大破に及んだため、西浜村の領主であった大和郡山藩の寺社奉行へ再建を願い出ている。さらに、旧本堂は法要などを行うには狭小であったようで、再建にあたって規模を拡大したいとしている。このとき願書とともに差し出した再建本堂の指図によると、建物は桁行七間、梁間三間の身舎の前後に一間半の庇が付属する規模で、正面には向拝を付ける計画であったことがわかる【史料１】。さらに、背面側は庇に奥行き二間半の「仏間」を設けており、仏間の後方は庇から一間後ろへ突き出している。本堂の再建は、1835（天保６）年頃まで続いたようで、同年５月に寺社奉行所へ造営が済んだことを届けている【史料２】。この建物が現在の本堂である。

また、1852（嘉永５）年からは、山門の再建に着手している。このとき建てられた門が現在の山門である。1853年11月には寺社奉行へ再建を願い出、翌年２月には京都大工頭中井家へ作事の許可を得るために願書を差し出した。願書の写しから大工は西浜村の勘兵衛であったことがわかる。このときの造営は速やかに進捗せず、1855（安政２）年に松木を山から伐り出している。現存する建物は欅がおもに用いられており、これらの松材は桔木など小屋組に用いたと思われる。上棟の詳細な時期は不明ながら、虹梁絵様などから判断すると、これから間もなく造営は完了したと考えられる。

山門は小規模な薬医門である。正面は男梁間に虹梁を架けるとともに、男梁上に三斗枠肘木を組んで軒桁を受けるという豪華なつくりである。木鼻には刳り抜きの彫刻を施す。今回は調査を実施しなかったものの、非常に上質な遺構である。

（２）萬明寺本堂の建築的特徴について

今年度は、境内の建物のうち本堂の建築的特徴を明らかにするため、平面図の実測、棟札・関連史料の調査を実施した。その結果を以下に示す。

萬明寺本堂

桁行14.3m、梁間15.6m、入母屋造、向拝一間、背側面軒下張出、桟瓦葺

1835年頃（天保６　寺蔵文書）

側通角柱　足固貫　腰框　虹梁形飛貫　大斗絵様肘木　中備なし　入側通角柱　切目長押　内法長押　飛貫三段　舟肘木　中備なし　一軒繁垂木　妻飾二重虹梁大瓶束　向拝角柱　虹梁形頭貫　象鼻　連三斗　実肘木　中備龍

彫刻　二軒繁垂木

本堂は、中規模の建物で南面して立つ。外陣と内陣を前後に並べ、内陣両脇に余間を配する浄土真宗寺院本堂特有の形式を持つ。正面には広縁を設け、側通りに虹梁を架け渡す。天井を格天井とするのはやや珍しい。向拝の左右の礎盤には、「御拝一式寄進」「田中源太夫」の刻銘がある。源太夫は嘉永期の史料に「旦那惣代」として登場しており、【史料２】の孫左衛門の後惣代となった人物と考えられる。

外陣は、畳を基準とした実寸で、正面七間、奥行三間半の規模である。中柱を一本ずつ二列に立て、内部を桁

写真88　萬明寺山門正側面全景

写真89　萬明寺山門虹梁絵様

写真90　萬明寺本堂正側面全景

写真91　萬明寺本堂妻飾

写真92　萬明寺本堂向拝虹梁絵様

写真93　萬明寺本堂向拝見返し

行に三分割する。中柱筋は梁行に虹梁を架け、矢来内のみは一段高めている。さらに、桁行にも虹梁を架け渡し、矢来内境を荘厳する。

内外陣境は全て円柱で、柱間には虹梁を架ける。さらに、欄間には金箔を押した牡丹の欄間彫刻を入れ、内外陣境を飾り立てている。

内陣は後門形式である。広い内部空間を確保するためか、須弥壇の奥行きをやや浅くとっている。柱は背面側を除いてすべて円柱で、金箔を押し上部は極彩色の彩色を施す。

内陣余間境は、柱の足元の痕跡から、もとは一段高く敷居が入っていたことがわかる。鴨居には二本溝が彫ら

写真94　萬明寺本堂外陣

写真95　萬明寺本堂外陣見返し

写真96　萬明寺本堂外陣架構

写真97　萬明寺本堂内陣

写真98　萬明寺本堂余間

写真99　萬明寺本堂座敷

れており、当初は余間境を建具で仕切れるようになっていたと考えられる。

余間は奥行き二間の規模で、最奥部に一間半通しの仏壇を備える。仏壇上部には虹梁を架け渡すとともに、その上の小壁には飛翔する鳳凰の絵を描く。

建立年代は、大和郡山藩に本堂の完成を報告した文書から、1835（天保６）年頃とすることができる。向拝の虹梁絵様などもその傍証となる。内外陣境をはじめ各所に円柱を用い、かつ虹梁を多用するなど、近世後期の特徴が良く現れた非常に重要な遺構である。

さらに、西近江路沿いに他の寺院とともに並ぶ景観は、西浜の特徴となっており、景観の重要な構成要素となっている。

参考文献

『日本歴史地名大系第25巻　滋賀県の地名』（平凡社、1991年）

饗庭昌威編『増補 高島郡誌』（弘文堂書店、1972年）

マキノ町誌編さん委員会編『マキノ町誌』（マキノ町、1987年）

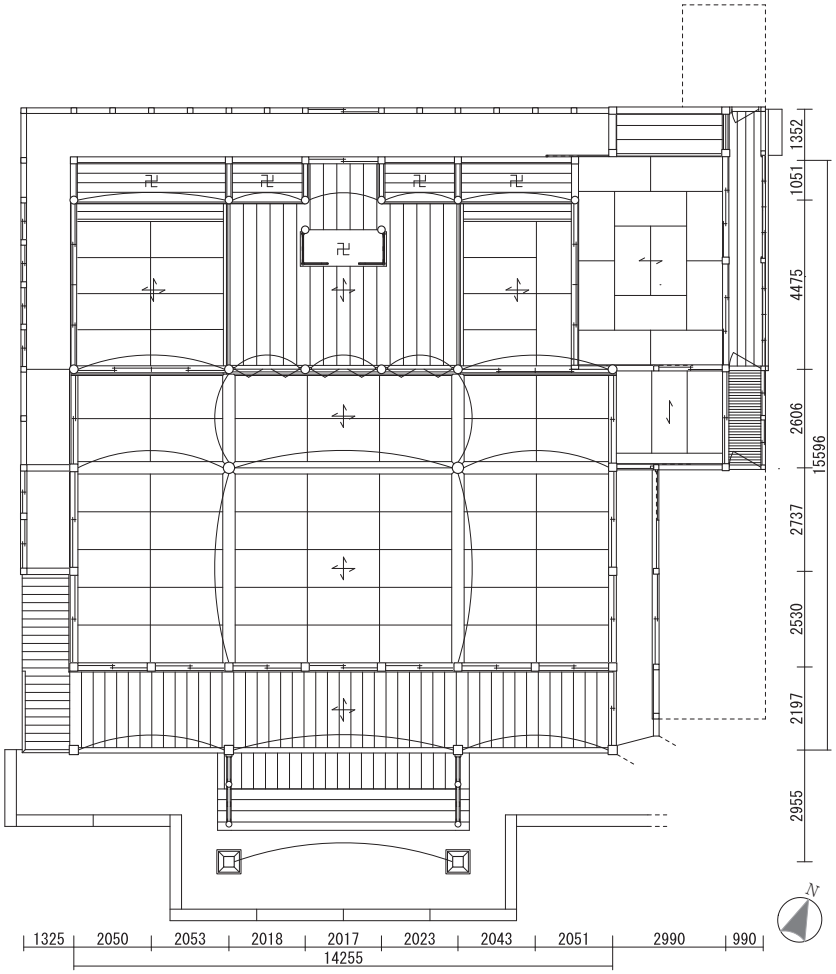
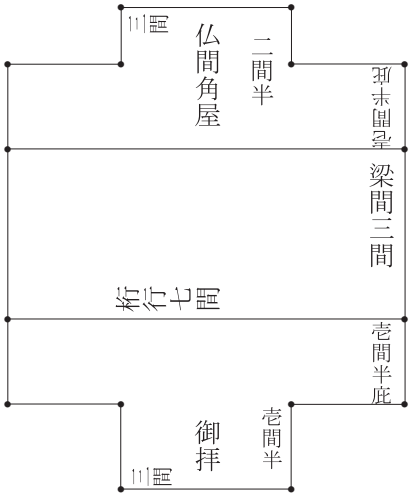


図17　萬明寺本堂平面図

【史料1】

江州高島郡西浜村萬明寺本堂建直墨引

屋根瓦葺



後　　前

右墨引之通建直奉願上候、以上、

江州高島郡西浜村

文政八酉年三月　　萬明寺（黒印）

同村庄屋

治郎助（黒印）

年寄

与四郎（黒印）

旦那惣代

孫左衛門（黒印）

寺社

御奉行所

【史料2】

乍恐書附を以御届奉申上候

一、拙寺本堂及大破候ニ付、去ル文政八酉年建

直仕度段委細書付を以奉願上候処、御許容

被成下難有仕合奉存候、依之其後普請ニ取掛り

此節ニ至普請成就仕候間、此段御届奉申上候、以上、

江州高島郡西浜村

天保六未年五月　　万明寺印

庄屋

井関吉郎次印

年寄

喜左衛門印

旦那惣代

孫左衛門印

寺社

御奉行所

右之通岩左太助ニ認させ五月二十日六

海津御役所江差上申事、

報 告 書 抄 録

ふ り が な	きょうとたちばなだいがく　れきしいさんちょうさほうこく
書　　名	京都橘大学 歴史遺産調査報告 2016
副　書　名	山科大塚・小山石切丁場、御香宮神社、二条城堀川石垣、萬明寺本堂
シリーズ名	京都橘大学 歴史遺産調査報告
シリーズ番号	10
編 著 者 名	一瀬和夫　登谷伸宏　広瀬侑紀　嵯峨根絵美　垣内彩那　奥田　尚
編 集 機 関	京都橘大学　文学部歴史遺産学科
所　在　地	〒607-8175　京都市山科区大宅山田町34　TEL. 075-571-1111
発行年月日	2017年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
伏見城跡（ふしみじょうあと）	京都市伏見区桃山町古城山（きょうとしふしみくももやまちょうこじょうさん）	26100	1172	34°56′13″	135°46′52″	2015年８月17～20日 11月14日		学術調査
大塚・小山石切丁場跡（おおつか・こやまいしきりちょうばあと）	京都市山科区大塚・小山（きょうとしやましなくおおつか・こやま）	26100	641	34°58′35″	135°50′16″	2016年４月30日 ７月３日 ８月７～10日 14～17日 12月23・25日		学術調査
御香宮神社（ごこうぐうじんじゃ）	京都市伏見区御香宮門前町（きょうとしふしみくごこうぐうもんぜんまち）	26100		34°56′05″	135°46′03″	2016年11月 ４・５日		学術調査
旧二条離宮（きゅうにじょうりきゅう）（二条城（にじょうじょう））	京都市中京区二条堀川西入る（きょうとしなかぎょうくにじょうほりかわにしいる）	26100	A453	35°01′46″	135°75′18″	2016年９月30日 10月１日		学術調査

京都橘大学 歴史遺産調査報告 2016

山科大塚・小山石切丁場、御香宮神社、二条城堀川石垣、萬明寺本堂

発　行　　京都橘大学　文学部

〒607-8175　京都市山科区大宅山田町34　TEL 075-571-1111

発行日　　2017年３月31日

印　刷　　㈲ 真　陽　社

〒600-8475　京都市下京区油小路仏光寺上ル　TEL 075-351-6034

京都橘大学
KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY